融

2019.7
Vol.27

融合化時代の都市政策提言
In the age of fusion Urban policy
Proposal magazine

ゆう Yū

特集●「和と技」
―新次元の国際交流時代と和のものづくり―

一般財団法人 大阪地域振興調査会
Osaka Research Foundation for Regional Development

融
2019.7
Vol.27
融合化時代の都市政策提言誌
ゆう

目　次

ごあいさつ
石原　武政 …… 3
（一財）大阪地域振興調査会 会長）

発刊に寄せて
新次元の国際交流時代における、大阪の活性化 …… 4
尾崎　　裕（大阪商工会議所　会頭）
「世界の中で躍動し、成長し続ける大阪」をめざして …… 6
～先端技術を生かした「スマートシティ」の実現～
吉村　洋文（大阪府知事）

特　集
テーマ/**和と技** ― 新次元の国際交流時代と和のものづくり
" WA and WAZA "
New dimension With the age of international exchange Traditional Japanese Monozukuri

特別インタビュー
和の精神と聖徳太子 …… 8
大野　玄妙（法隆寺管長）
鉄道事業者から見た大阪・関西の未来像 …… 13
真鍋　精志（西日本旅客鉄道株式会社　取締役会長）
川井　　正（西日本旅客鉄道株式会社　取締役兼常務執行役員近畿統括本部長）

寄　稿
日本遺産を活用した地域活性化 ～ 北前船寄港地・連携の取組み～ …… 23
秋田　健治（大阪市経済戦略局　観光部長）
百舌鳥・古市古墳群の世界文化遺産登録 …… 26
勝真　雅之（堺市文化観光局世界文化遺産推進室　室長）

特集テーマ
観光客が日本の商店街に感じる魅力 …… 29
石原　武政（一財）大阪地域振興調査会　会長）
「裸貸（はだかがし）」を支えた技と経済 …… 33
髙田　光雄（京都美術工芸大学教授／京都大学名誉教授）
和室の世界遺産としての価値 …… 36
服部　岑生（千葉大学名誉教授）
世界無形文化遺産に「伝統建築工匠の技」提出 …… 39
ベルリンの木工工房から見えてきた日本の技術 …… 40
内田利惠子（建築設計室Morizo－　主宰（ベルリン事務所））
「表具の技があぶない」私の表具師修行から見えてきたこと …… 43
中野智佳子（紙戸屋・中野表具店）

上町台地アートプロジェクト
芸術さろん＠てらまち　第1回 …… 46
聖徳太子往来の道研究会（概要） …… 48

セミナー報告
一般財団法人大阪地域振興調査会2019セミナー
聖徳太子往来の道・再発見と次世代観光
― 歴史都市大阪と奈良のつながり再発見と次世代インバウンド観光の近未来 ― …… 49

ST研究会レポート
ショッピングタウン研究会活動報告 …… 63

活動レポート
榮友会 平成30年度活動報告 …… 66

財団概要
一般財団法人 大阪地域振興調査会の概要 …… 67

ごあいさつ

「融」27号を発刊するにあたって、一言ご挨拶申し上げます。

本号は、元号が「令和」と定まり、最初の号となります。大阪は「大化の改新」により初の年号が発布された都市です。聖徳太子1400年忌は2021年に迎えますが、太子は【和】と【国家の自主自立】という理念を残されました。607年、遣隋使の答礼使を迎えたのは四天王寺ともいわれ、「木工の守護神」としての太子に因み、手斧（ちょんな）始め式や番匠堂で曲尺太子法要が毎年催されています。

新次元の国際交流時代に突入した現在、改めて和の精神が問われています。和食が世界遺産になるほど欧米では日本ブームですが、ものづくりや建築の世界も巻き込んで【和】を見直す時代にきているのではないでしょうか？

そこで本号では、以上の背景を踏まえつつ、特集テーマを「和と技―新次元の国際交流時代と和のものづくりー」とし、大阪商工会議所会頭　尾崎　裕様、大阪府知事　吉村洋文様、法隆寺管長　大野玄妙様ほか多数の方にご執筆いただき、発刊の運びとなりました。ご多忙にもかかわらずご執筆いただいた皆様に、心から御礼申し上げます。

「融」は、都市再生、都市活性化のための提言誌として、各界から一定の評価をえていますが、本号も大阪そして日本の将来にいささかなりとも寄与できることを祈念し、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

今後とも、各位のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

令和元年7月

(一財) 大阪地域振興調査会会長
石原　武政

発　刊　に　寄　せ　て

新次元の国際交流時代における、大阪の活性化

尾崎　　裕
大阪商工会議所　会頭

新たな時代がスタート

新しい時代「令和」がスタートいたしました。元号は、その時代を反映し特徴づける、区切りとしての文化です。新しい時代が輝くものとなるよう、新たな課題への挑戦を繰り返し、大阪・関西、そして日本の発展に力を尽くしてまいりたいと考えております。

世界の注目が大阪に集まるチャンス

こうしたなか、近年、大阪・関西は、多数の外国人観光客で賑わっています。観光だけでなく、研究やビジネスなど様々な目的で人が集まることは、都市の発展・活性化を目指す上では欠かすことができません。またインバウンド観光に加え、先般閉幕したG20サミットや、秋に開催されるラグビーワールドカップ、そして「大阪・関西万博」と、世界の注目が、大阪・関西に集まるチャンスが続きます。

この機会をとらえ、観光で来た人が、次は学びに来る、仕事で訪れる、やがて大阪に住む、という好循環を生み出していきたいと考えております。そのために、大阪・関西万博がコンセプトとして掲げる「未来社会の実験場」を体現すべく、時代を先取りした製品、インフラ、サービスの社会実装をめざして、万博の準備段階から、大阪にアイデアを呼び込む仕掛けづくりをしていきたいと思います。

デジタル革命の幕開け、データ活用に挑む

この20年で進展したデジタル化の流れは既存業界の垣根を壊すなど大きな影響をもたらしましたが、現実の世界のリアルデータが主役となる、本当のデジタル革命はこれから幕を開けるとも言われています。

この変化を恐れるのではなく、多くのリアルデータを持つ日本企業がデジタル化に本格的に取り組めば、様々な新製品やサービス、ビジネスモデルを生み出せる可能性は十分にあると思

います。またIoTやAIなどデジタル技術を用いた生産性向上にも取り組まなければなりません。

とはいえ、何が新たな価値や利益を生み出すのか、走りながら考え、トライアンドエラーを繰り返す必要があると思います。

オープンイノベーションや実証実験を支援

そこで大阪商工会議所では、オープンイノベーションから実証実験までを包括的に支援しようと、大阪府・市、本会議所によるオール大阪での体制を整え、大阪城公園や中之島公園などを実証フィールドに、企業に実証実験の場を提供しております。また次世代の交通サービスとして期待されるMaaSや、AI、IoT、ドローンなど、技術やサービスごとに関心を持つ企業が集まり、連携して新ビジネスを創出する機会を設けております。さらには大阪工業大学とともに、都心型オープンイノベーション拠点「Xport」を開設し、企業の課題やアイデアを出し合える場を提供し、運営しています。

これら「未来社会の実験場」に向けた取り組みを積み重ね、2025年の万博以降も、新たなビジネスの創造を志す人々が、国内外から集まる都市をめざしたいと思います。

「食」の魅力を磨き、大阪ブランドを向上

一方、今後も安定的な伸びが見込まれるインバウンドでは、観光客の受入環境整備にとどまらず、富裕層や観光を機に大阪との交流が続くと見込まれる対象に向けて、攻めの投資に踏み込む段階にきています。

海外の方から関心が高い、日本の文化や生活などを堪能できる、新たな観光コンテンツの開発や関連ビジネスの創出に取り組み、大阪の都市ブランドの向上につなげていきたいと思います。

なかでも、大阪の魅力の一つにあげられる「食」を、世界に通用するブランドにまで高め、発信していきたいと考えています。大阪には、和洋中、様々な分野において、新しいことにチャレンジするイノベーティブな店舗や料理人がおられます。このポテンシャルを活かして、食の魅力に一層磨きをかけ、アジア・世界に向けて発信し、世界中から食を目当てに大阪にお越しいただけるようにしていきたいと思います。

外国人材を受け入れる環境を整備

また、海外の方が大阪・関西で、存分に力を発揮しビジネスに従事していただくための環境整備も不可欠であります。4月に新たな在留資格制度が創設されましたが、受入企業の実態を把握し、必要であれば国などに改善点を要望するなど、より望ましい形を模索していきたいと思います。

“夢がかなう大阪”、そのための“チャレンジを後押しする大阪”、として、国内外の人材や企業から選んでいただけるよう、大阪商工会議所も引き続き役割を果たしてまいりたいと存じます。

「世界の中で躍動し、成長し続ける大阪」をめざして
～先端技術を生かした「スマートシティ」の実現～

吉村　洋文
大阪府知事

今、大阪は、未来に明るい兆しが見えています。

大阪府を訪れた外国人旅行者数は、2017年に1,000万人を突破しました。7月6日には、世界遺産委員会において、念願であった百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録が実現しました。これを機に、世界中から、ますます多くの方々に来阪していただきたいと考えています。大阪府、大阪市、堺市が一体となって大阪の成長に向けて取り組んでまいります。

大阪経済についても、景況感が回復するなど明るい兆しが見えており、企業にとって、グローバル化などさらなる飛躍の好機です。本年4月に大阪府と大阪市が共同で発足させた大阪産業局のもと、海外展開を望む企業やベンチャー企業を強力にサポートいたします。加えて、うめきたといったイノベーションを生み出すまちづくりも進めてまいります。

6月にインテックスで開催されたG20大阪サミットでは、各国首脳が一堂に会し、気候・エネルギーや雇用といった世界共通の課題について議論されました。各国首脳をはじめ、政府関係者、海外の報道関係者等を、万全の警備体制のもとお迎えするとともに、天下の台所・大阪の食文化や、伝統工芸品や工業製品の技術力についても発信いたしました。こうした取組みを通じて、大阪のホスピタリティや都市魅力、安全・安心な国際都市「大阪」を世界中にPRすることができました。

G20大阪サミット成功のバトンを受け取り、さらに世界で大阪が躍動していくのが、2025年大阪・関西万博です。「いのち輝く未来社会のデザイン」というテーマのもと、世界中の人々があっと驚く未来社会を示し、これまでに類を見ないインパクトのある万博をめざします。万博に向けて、国連総会で採択された世界共通の

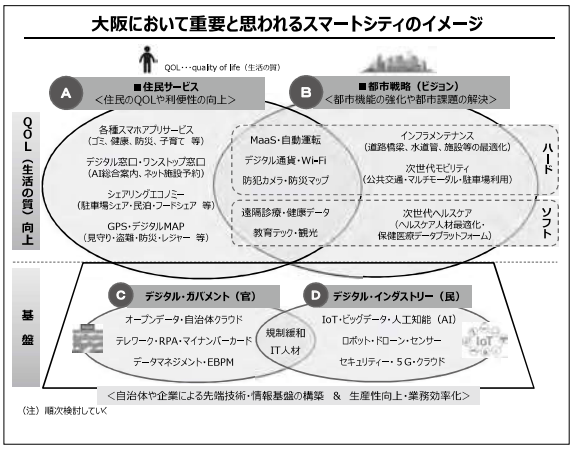
目標であるSDGsの体現など未来社会を先取りする施策を進めるとともに、災害に強いまちづくりやユニバーサルデザインなど、これまで実施してきた施策を加速させます。このような取組みにより、万博を成功させることはもとより、世界から「人・モノ・お金」を呼び込んでイノベーションを巻き起こしてまいります。そして、世界の中で躍動し、存在感を発揮する東西二極の一極として、日本の未来を切り拓き、わが国の成長をけん引する「副首都・大阪」の地位を確立し、豊かな未来につなげます。

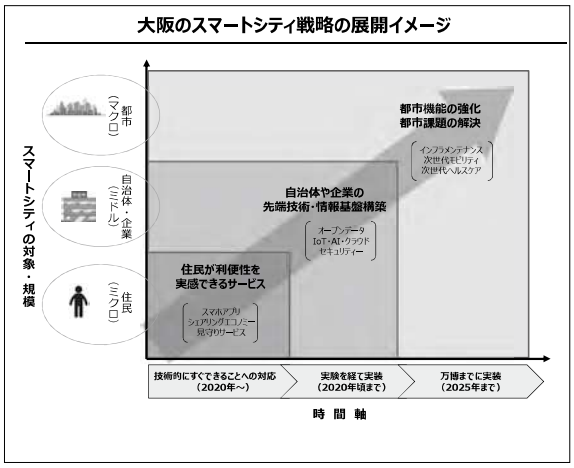
今後、特に力を入れたいのが、「スマートシティ」の実現です。万博を見据え、また、超高齢社会において持続可能で快適に生活できる社会の構築に向け、民間企業や府内市町村と連携・協働して、IoT、ビッグデータ、AI、ロボットなどを活用した先端技術によって、都市の課題を解決するとともに、住民サービスの充実を図ります。

具体的には、スマートフォンのアプリで、ゴミ収集・健康・防災・子育てといった行政サービスに簡単にアクセスしたり、自動運転の車両で高齢化が進む団地内を巡回することなどにより、住民の皆様に「生活の質が向上した」と実感していただけるまちづくりを進めていきたいと考えています。

そして、さらなる次のステップとして、最新技術の実装に先進的に取り組むことで、「最先端技術をやるなら東京ではなく大阪で」と言っていただけるようにしていきたいと考えています。このような取組みを盛り込んだ「スマートシティ戦略」の策定について、府市協働で検討しているところであり、今後、戦略に基づいて、大阪モデルのスマートシティの確立をめざします。

大阪をさらに成長させるという強い思いで、さまざまな施策を展開していきますので、皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。





（令和元年5月20日開催　第18回　副首都推進本部会議資料より抜粋）

特集

「和と技」ー新次元の国際交流時代と和のものづくりー

Special Interview

和の精神と聖徳太子

〈聞き手〉吉野常務理事

大野　玄妙

法隆寺管長

吉野：本日は夏安居のご講義の中、お時間をいただきありがとうございます。

今号のテーマは「和と技」、和の精神や和のものづくりを取りあげています。文化庁はこの3月にユネスコ世界無形文化遺産に、「伝統建築工匠の技」という建築技術を受け継いで行く為の「技」を申請しました。

和の技術を素材も含めて保存していこうとの流れがあります。この前に登録された和食同様、障子やふすま、畳など、日本の職人の技が注目を浴びています。法隆寺のようなトップクラスの国宝を維持する職人たちだけではなく、日本の技術が最上層に行くためには、裾野の職人をしっかり育てねばならないと思っています

大野：裾野をしっかり育てなければ名工も出てこないですね。

吉野：裾野が衰退している。中国の安い材料や工場ではなく、本物の木材や和紙を使って本物の技をつなぐ人が急激に少なくなっています。

大野：日本人が日本の昔の家屋から離れてしまっているのが一つの問題です。マンションばかりが増え、鉄とコンクリートばかりで、とても残念な感じがする。

吉野：ドイツは逆で、日本の畳や建具に人気がある。日本で修業したドイツ人が母国で「TAKUMI匠」という名前の工房を開き、開業したところ注文がこなせないほどの人気となっているそうです。ドイツの住宅は天井が高いので日本の規格では合わない。乾燥するので、現地の材料を使って現地の職人が製作しているが、日本の

デザインが大変喜ばれている。

大野：マンションが日本の木造建築の文化を壊している。最近のマンションには和室がないものや、申し訳程度に一室あるだけのものも多い。日本の精神性をつないでいくには和室は必要だと思う。和室には仏壇があったり神棚があったり、それで家族がまとまっていた。ところがマンションには仏壇を置く場所がない。近所の寺では、マンションで暮らす檀家が寺に仏壇を預けにきて、本堂は仏壇だらけである。寺に預けたままで、表現は悪いがそれこそ先祖を捨てにきていると言われかねない事態です。

〈聖徳太子の和とは〉

吉野：さて、本題です。元号の令和にも和がついています。漢字学者の白川静先生は、和は軍門の前で講和するとの字義を書かれていますが、否定的な見解もあります。『日本書紀』の推古20年の記事に「天皇和曰」とあり、「天皇が和して曰う」和んでのたまった。正月の宴会で天皇が、蘇我蝦夷が詠んだ歌に対して返歌をした。私は、和やか、和らぐ、和むという意味が強いと思っていますが、聖徳太子が言われた和はどんなイメージだったのでしょう。

大野：聖徳太子の「和を以て貴しとなす」という言葉は、中国の『論語』『礼記』に出てくるが、意味合いが異なり、礼を保持していくために和が必要である。つまり礼の働きとして和が必要である。ところが、聖徳太子の場合は、その後ろに「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」とある。

聖徳太子は仏教の研究者で、そうとらえてしかるべきであるが、ほかに理由はないかと考えた。厳密な数字は出てこないが、400年頃に朝鮮半島を経由して漢字が伝えられた。王仁という現在の八尾あたりの人だったと思うが、それ以降、日本語の中で日本人の宗教観や精神性を代表するものとして和を当てはめたのではないか。

吉野：日本人の精神そのものとして和を使った。

大野：日本人の心として和という文字を使ったのではないか。もっと古い文献等に使われていないかと調べると、『古事記』があったが、「わ」と読むのではなく、「にき」である。賑わいの「にき」である。

聖徳太子の本当の思想的・精神的なベースはどこにあったのか。聖徳太子は皇族で、皇族として行うべき仕事がある。『日本書紀』にも載っているが、年がら年中ご先祖や神様をお迎えし、国民が平穏・平和で安定していること、五穀豊穣、穀物がたくさん実ることを祈る。それを生業としていた。これは欽明天皇13年10月条に載っている。仏教が入ってきたときに反対した物部尾輿、中臣鎌子の言葉として残っている。それが仕事である。それをある。それを考えると、聖徳太子の本当のベースは神祇祭祀にあった。だから神社でもまつられている。

聖徳太子という個人は蘇我系の皇族として育っている。蘇我系は渡来人が多いので、当然、聖徳太子の仲間も渡来人が多く、渡来人から大陸の情報を得ていた。そういう中で仏教も入ってきた。公伝以前の仏教で、522年に司馬達等が日本に渡来、『扶桑略記』には司馬達等が仏教を信仰したと記されている。

吉野：538年よりも前に入ってきている。

大野：入ってきたのは明らかである。その中で、聖徳太子、朝鮮半島からの渡来人たちはどうい

う仏教を信仰していたか。これは間違いなく菩薩思想である。これは当然のことで、それよりも前に中国は菩薩思想だった。菩薩思想の行き着くところは、すべての者が等しく仏道を成ずることができるである。

日本人の精神性とは、限られた地域の中で、自然の脅威や、自然の恵みを受けた際には、その恵みを分かち合い、皆で助け合う。いたわり合って皆で頑張っていく。そういう構図になる。

吉野:持ち寄って和する。足し算は「和」なので、合わせる、融合するという意味もあると密かに思ってましたが、そういうことだった。

大野：そういう意味合いもある。日本の国は、文字がなかったので、古い時代から漢字を使って表現していた。人々の精神的なよりどころは収穫である。秋の収穫には村の鎮守、神社に集まり、ワイワイと賑わう。賑わうが「和」である。「にき」と「にぎ」は同じ意味で、収穫したらご先祖たちと共食する。それが村祭りであり、自分たちだけではなく、先祖も一緒に楽しむ。名前も知らない遠いご先祖も含めて一緒に楽しむ。それで賑わうわけです。

吉野：仏教とご先祖様との共食が日本の仏教の源流にあったということですね。

大野：そうです、神様の世界で最も古いといわれているグループの中に熊野信仰がある。熊野信仰も基本的には、本宮は食べ物、速玉は男根、那智は女根で、古い形は繁栄と食事しかない。御食の「け」です。那智は滝そのものがご神体で、速玉神社の近くに突き立った岩がある。男根です。

和は日本人そのものを指している。そういう環境の中で長い間に培われてきたものである。日本の精神性というか、国民性も含めて、日本人独特の思想です。

そういうベースがあって中国から菩薩思想が入ってきて、両方が聖徳太子の頭の中で一つとなった。

吉野：菩薩思想と日本の和の思想とが合体した。それで聖徳太子は「和を以て貴しとなす」や三宝という言葉が出てくるのですね。

大野：いずれにしても、そういう形で、和を以て貴しとなすという言葉が出てくる。聖徳太子は、仏教の研究者で、大陸の文化に秀でた人、外交が上手だった。そういうことは書いているが、神様とは結び付かない。

〈和の創造性と令和の意味〉

吉野：和でないものは何かと考えたときに、なぜ聖徳太子は和と言ったのか。大陸を意識して、それに対して和だったのかと思っていたが、今のお話では、それだけではなくて両方が入っている。

大野：両方が入ってくると今度は、三宝の中に仏・法・僧があり、僧は和合衆と表現されている。和合衆は、平和のために皆で努力し、実際に実践していく人たちのことで、僧侶にたとえられる。そういう考え方がある。

日本的な考え方の中に新しい文化が外国から入ってくると、最初は模倣であるが、そのうちに徐々に自分たちで解釈し、理解して自分たちのものを創り上げていく。これも和合であり、自分たちの文化に仕立て上げていく。和様という言葉が出てくる。

吉野：『古事記』に出てきた和の「にき」は、年代的には聖徳太子よりも前で、聖徳太子の頭に

も入っていた。

大野：はるかに前だが、知っていたと思っていて、日本人の心持ち、精神性をあの文字で伝えた。その中には民族的なものもある。学生時代によく言われたのは、明治・大正・昭和は「明るく・正しく・仲良く」である。平成は平等なのか、平和なのか。新しい元号は令和で、昭和と令和の違いはどこにあるのか。

吉野：令という言葉は7世紀からありますが、大宝令(律令)が初めての本格的官僚制度で兵部省も設けたので、あまりいい印象を持っていません。

大野：令和は万葉集を根拠としているが、中国的に読むと「和せしめる」となる。元号として、中国人が言っているのは、発音が同じであれば別のものでもよくて、隣という字が「令」と同じで、隣近所が仲良くするという意味合いとして中国人は受け止めている。漢文や中国の古典をやっている人たちは和せしめると読む。

「隣」は、中国的な考え方からすると、中国の政策の正当化であり、アメリカと仲良くするよりも中国と仲良くしなさいという意味合いがある。

令和は、神様であれ、天であれ、ご先祖であれ、仲良くしろとおっしゃっているのだと思っている。

吉野：なるほど令にはそういう意味があったのですね。

大野：昭和の昭は、仲良くしましょう、あるいは仲の良い世の中にしていきたいという願望であった。平成は平和な時代というが、海外ではテロや戦争等の問題もあった。それを考えると、あれだけ仲良くすることを求めていたのに、おまえたちは何をしているのか、仲良くせよ。ご先祖がそう言っているようにも思える。

吉野：うがった見方をしていました。大宝律令でまた戦争の組織的な流れが来る、そんな読み方をしてはいけないと思いながら、逆に隣という字、仲良くするという概念は大事ですね。

大野：日本的には神様が怒っている、ご先祖が怒っている。

〈聖徳太子1400年に向けて〉

吉野：聖徳太子1400年ご遠忌に向けて法隆寺としては何をなされるのか。それについて何か思われていることはありますか。

大野：聖徳太子ご遠忌は法隆寺では10年ごとに行っている。大きいのは100年区切りになるが、大正10年の1300年の際には、それを成功させるために聖徳太子奉賛会という財団を立ち上げ、そこからの資金で成功に導いた。その財源は国債と満鉄の株で、戦争で紙切れ同然になった。

その当時、財界の人たちの説得に尽力してくれたのが東京芸大、昔の東京音楽学校であった。その方々の知恵により、昭和になって、戦後は法隆寺が資金を出したが、財団はオウム事件まで続いた。あの事件で、宗教にかかわる財団は財政状況を徹底的に洗って、つぶすべきだとなり、閉鎖となった。

多くの文化財や寺を守っているのは行政や所有者だけではない。国民の財産だから国民が自発的に自分たちで守っていく。その機運を高めていく必要があると思っている。私も70を超えているので残りの人生は10年もない。半世紀が過ぎたら知っている人間がいなくなる。引き継いでくれる若い人たちが守っていきやすい環境づくりが必要だと思っている。

吉野：1400年の際に財源的なものを集める主体が難しいですね。

大野：1400年御恩忌の法要がわれわれの仕事です、それは蓄えの中でできるが、催事などの仕掛けはマスコミや識者の知恵を借りないとできないと思っている。

吉野：法要だけでは、聖徳太子を継承していく大きな節目としてはもったいない。

大野：読売は10年前からキャンペーンを行ってくれている。2020年には朝日新聞が日本博に合わせて東京国立博物館で展覧会を開催。ご遠忌の年である2021年には読売新聞が奈良国立博物館と東京国立博物館で開催。日本経済新聞社さんも何か考えておられるようだ。3年先なのでまだ混沌としているが、その中で何ができるかを考えていきたい。聖徳太子に関しては奈良県も予算を組んでおり、斑鳩町も東京で講演会を行っている。

信貴山の本尊は毘沙門天で、聖徳太子が物部守屋と戦をしたときの四天王でもあり、楠木正成とも関係がある。信貴山の仏像は法隆寺の僧がつくったことでもかかわりがある。

四天王寺には西門信仰があるが、日想観によく似たものが法隆寺と信貴山の間にもある。法隆寺の西側に昔は金光院という聖徳太子常念仏のお寺があった。薬師寺の僧が退居して、そこで日没に信貴山に沈んでいく夕日を拝んだという記事がある。

吉野：聖徳太子は各所に足跡があるから、1400年ご遠忌を機に、難波津、難波宮、四天王寺、叡福寺、法隆寺などがつながるといいですね。インバウンドの表面的な観光客ではなく、国際交流のための観光、本物の、「光を観る」文化体験で、深いつながりを創っていく事が大事だと思います。

大野：物見遊山的な観光ではない。観光振興で世界遺産ではない。世界遺産になり、それを皆で守っていこうという機運が高まれば自然に観光はついてくるもので、先に観光ありきではない。

吉野：面白くて、深いストーリーが必要です。

大野：奈良や京都、自然遺産の知床などは、世界遺産になっても変化はなかった。もともと多くの人が集まるので、それに対するノウハウを持っていた。ところが、それ以外のところは、次の年に華が開き、翌年にはしぼんでしまう。町の人たちが自分の町自慢にならなければいけない。

吉野：2021年か2022年に、それをつないで、単に歩くのではなくて深い中身、例えば各寺で連続講義やシンポジウムを開いて世界中の人に来てもらい、その人たちにも参加していただくようなことはどうでしょうか。

大野：法隆寺の夏季大学で今年は、四天王寺の森田管長さんも来て下さる予定だ。7月26日から29日までの4日間です。法要の行列では、叡福寺と達磨寺、兵庫県の斑鳩寺、明日香の橘寺から今までが出仕して下さっている。

昔は聖徳太子の朱印帳があって、それで回ったりする人もいた。四天王寺にもあって、それを復活させたいという話もある。

吉野：ルートづくりは大変調整が難しいが、メインルートを用意して深く体験してもらい、通えば通うほど面白く、リピートすることで深くなって、地域の人々とつながっていくような観光ルートができればいいですね。聖徳太子1400年ご遠忌の大成功を期待しています。今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。　文責：事務局

Special Interview

鉄道事業者から見た大阪・関西の未来像

〈聞き手〉吉野常務理事

真鍋　精志

西日本旅客鉄道株式会社
取締役会長

川井　　正

西日本旅客鉄道株式会社
取締役兼常務執行役員近畿統括本部長

吉野：本日は、ありがとうございます。全社トップの方と近畿統括のお二人にお話をいただける事、本誌でも初めてですがよろしくお願いします。

真鍋：大阪の現状を大きく言うと、万博が決まった今、これを前提に、日本の中の大阪だけではなく、グローバルに大阪をどうしていくかを考えていく時だと思う。

2017年の上町台地シンポジウムのご挨拶で近鉄の小林さんが「文化と暮らし」と言われた事が印象に残っています。都市づくりを息長くやるにはこれがベースになると思います。万博、IR、スーパーメガリージョンなど、全体像は大阪を起点とした広域で取り組んでいく必要がある。もう一つ、拠点の地域がしっかりしている事。その両面の組み合わせでやっていかなければならない時代です。

吉野：大阪が単独で成長することはあり得ない。京阪神はもちろん重要ですが、瀬戸内や奈良・和歌山とも大事な関係があって、今後はそちらが伸びそうだと感じています。

真鍋：インバウンドで来ている方は関西国際空港からが多いですが、関空インで来て大阪・京都で終わっている。もっと広域に広げたい。観光だけではなく経済の広がりにつなげるという発想もありますが、大阪のコアがしっかりしていないといけない。面白いからと難波や心斎橋に来ても、そうした流れはパタッと止まる可能性があります。その意味では、文化を含めて大阪という都市の定義が明確にあった方がいいと思います。

吉野：大阪は歴史文化をもっと真剣に考えない

といけないと思っています。聖徳太子1400年忌が迫っている上町台地は歴史資源の宝庫で、深いところの再発見が必要です。環状線も京橋や森ノ宮は大阪城エリアになります。天王寺には四天王寺があり、大公園や多くの社寺資源があるので、これから期待できると思っています。

〈関西の未来像と観光の大変化〉

真鍋：都市には、幹としっかりした枝があることが大事なので、全体の位置づけをどう考えていくか。ここに私どもの絵があります。(図1)

吉野：素晴らしいですね。私も、関西経済同友会の都市魅力委員会（京阪・加藤委員長）の下で、よく似た絵を描いていました。まさにこれです。

真鍋：万博の話は、夢洲をどうするかばかりが議論されていますが、私どもは、長期でじっくりやるべきだと思っていて、大阪に限定すると、大阪環状線とその地域一帯を一括でとらえた活性化が大事だと思っています。

スーパーメガリージョンの話では、うめきた開発と新大阪の広域ハブ拠点化。新大阪は国の地方創生回廊中央駅構想があり、北陸新幹線・東海道新幹線・山陽新幹線が入り、リニアも入ってくる。いろんな構想がありますが、九州新幹線、四国、山陰も入ってくるので、長期の展望をもつ地方創生の中央駅という位置づけで、駅だけでなく、それを起爆剤に周辺地域の大胆な都市整備を計画中です。

私たちのプロジェクトとしては、北側に「うめきた」や新大阪広域ハブ拠点があり、もう一つはなにわ筋です。これを難波につなぐと環状線が少し楽になるので、夢洲へのアクセスができる、関空までどうするかという話も出てくると思います。

吉野：大きな沿線の未来像と連動した形で、大

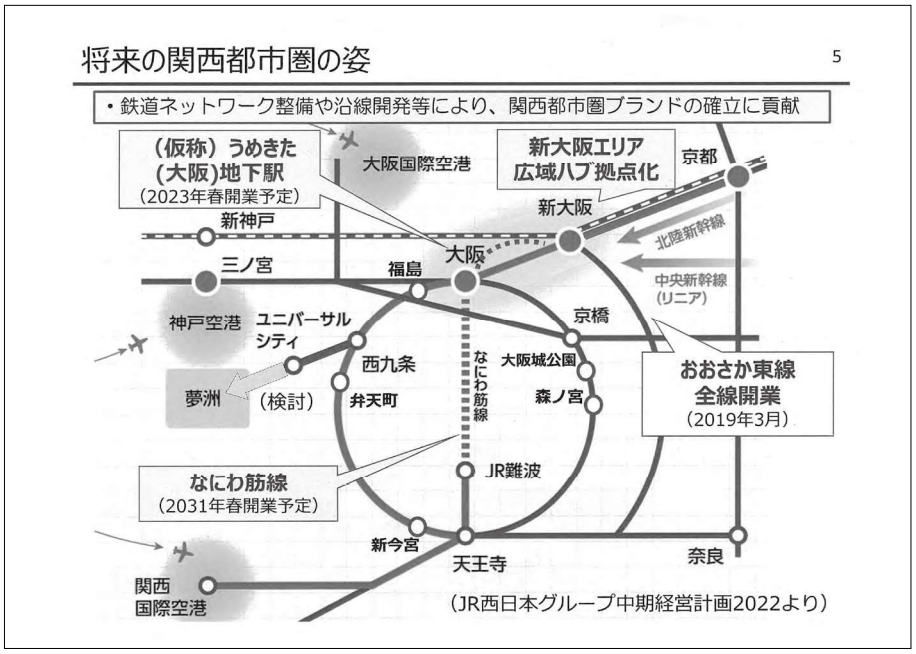


図1　JR関西都市圏図

阪都心も大きく変わりそうですね。

真鍋：会社ができて30年が過ぎました。JRになった当初は、新快速で広域から大阪に通勤してもらうことが大きな柱でしたが、今は姫路であれば姫路の生活圏でやっていけるよう、拠点化ができています。明石周辺も同様です。滋賀県の草津や守山あたりにも拠点ができています。

都心回帰というよりも、それぞれの地域で生活拠点があり、往時のように遠くに住んで大阪まで通うのではなくて、各地域に暮らすというコンセプトの時代が来ています。

吉野：大阪の都心ではキタ・ミナミだけでなく、上質の船場や界隈性の福島、空堀、天満など新しい魅力エリアが注目され、情報発信の手段も様変わりしています。

真鍋：私たちは若い女性向けに「マイ・フェイバリット関西」というウェブ配信をやっていますが、関西だけではなく、瀬戸内まで見どころを紹介しています。消費自体も、時代がどんどん変わり、レストランや飲み屋ではなく、ゆっくりとした時間を過ごせる喫茶店やカフェが重要になってきました。京都には『京都の喫茶店』というタイトルの本が10種類以上あるわけです。ところが大阪は、たまに特集される程度で、大阪の喫茶店という本はほとんどない。

吉野：確かにマスの雑誌は弱いですね。都心ではコアな方々のフリーペーパーやフライヤーが出回っています。例えば空堀の『からほりらへん』マップには、隠れた場所や路地の中に良い店が登場します。

真鍋：大阪市域が広すぎるのであれば上町台地の縦の筋の中など、地域の特色毎のとらえ方はあると思います。

もう一つの論点は、日本人の観光に対するニーズ、流動は、今年がピークで下がっていくと見ています。インバウンドが増えているから感じていませんが、団塊の世代が70歳を超えて80に近づくので、年に3回は旅行に行っていた人が3回も行けなくなったりするわけです。旅行や観光のスタイルを変更しなければならない。

吉野：新しいターゲットに対して掘り起こしていくという事でしょうか。

真鍋：動きまわるというコンセプトではなくてスローライフ、滞在型。あるいは、あちこち見てまわりよりは、訪れた街、観光地でゆっくりくつろいで過ごす。旅での時間の過ごし方の概念を変えていく。外国の方はウェブで調べてここに行こうと決め打ちで訪れます。来たときにどう過ごしてもらうのか。1時間でも2時間でも、じっくり休める場所がある。そういうライフスタイル、旅行スタイルに変えていく。これから高齢化で、動きまわる形ではない観光を狙わなければいけないときに、それをどうするかが問われている。

吉野：空堀の路地にある紅茶専門店は、高くて一杯約600円もしますが、予約がないと満席が多い。ほとんどが女性かカップルで3時間いる人もいて、長時間いても追い出されない。

真鍋：ロンドンのホテルに夕方チェックインすると、アフタヌーンティーの延長で妙齢を過ぎた女性たちが囲んでいて、外で食事をして8時、9時に帰ってくるとまだいるわけです。こういう過ごし方に変わってくるのではないか。

歩き方も大事になると思っています。新今

宮に星野リゾートの「OMO」ができますが、東京の大塚にあるので泊まってみました。一人1500円を出して飲み歩きのコースに行きましたが、ホテルのスタッフが2時間ついてくれて、大塚の駅前から半径500mにある飲食店3軒を案内してくれます。なぜここに人が来るのか。大塚に何かあるというよりも、隣の巣鴨にとげぬき地蔵があり、江戸時代の門前町が隣の駅まで広がっている。そこに残っていた飲食店が今風になって新しい体験観光ができるのです。

新世界の「OMO」でも新今宮から通天閣、天王寺、難波方面に足を運びながら案内してもらえる。そういうメニューが出てくると思います。

吉野：私はヨーロッパで、時々ゲストハウスやホステルに泊まりますが、無料か低料金で多様なアクティビティがある。東京では銭湯めぐりができます。また、全国社寺観光協会というところが主体となって、「和空」という宿坊を全国展開しています。四天王寺の和空が第1号で、法隆寺でも建設中です。四天王寺をお参りして、お坊さんの法話や写経体験があり、近くの愛染さんで朝の修行を見学したりするのですが、体験を望んでいる外国人が朝から街を巡っています。

真鍋：山崎豊子さんの『船場狂い』は、船場の北側が実家で、船場の御寮さんにあこがれた女性の話ですが、船場の一角から一線外れると世界が変わり世の中の見る目が違う。自分は船場に住めなかったから娘を船場に嫁がせる。本を読むと船場の範囲は堀に囲まれていたことがよくわかります。書物からの知識で大阪のイメージを持つことも大事です。船場は元来、職住一体でした。住み込みで働く。今は住み込みの時代ではないが、都心の居住地になってきています。

吉野：上町台地は長屋や町家が密集していますが、近年、高層マンションが急増してきたので多様性がでてきた。高額の買い物をする人も商店街としては欲しくて、高い値段を取るすし屋が長屋にあったりします。そういう人が住まないと既存の住民だけでは新しい店が成り立たない面もあります。そのバランスが大事ですね。

〈環状線の大改造と周辺エリアの可能性〉

真鍋：大阪都心を考えるときに、外せないのは環状線とその周辺の事です。環状線は東京の山手線と比べるとポテンシャルを十分に活かしていないところがあったので、2013年から改造に着手しました。

環状線全体を近代的でわかりやすい駅にするために、表示を統一したり、ホームの案内を大きくしたり、駅の特色を出そうと発車合図のメロディーを駅ごとに変えたり。環状線は19駅ありますが、たまたまEXILEのメンバー数と一致したので、各駅の担当を決めて、コンサートをしたり、結婚式をしたり、ぐるなびと一緒に環状線周辺のグルメ探訪をしたりと楽しみの場を作ってきました。

上町台地でいうと森ノ宮の東側はこれからの可能性が高いエリアですが、やはり住んでいただく街にならないかと思っています。

吉野：環状線の東側は、URの土地もあり、公園には先日、クールジャパンのホールが3つできました。オープニングに来られた市長が、こ

こは第一ステップで、これから東側も含めてお客さんに来てもらえる文化ゾーンにと発言されていました。

真鍋：てんしばとJO－TERRACEは似ています。これもいいですが、環状線周辺では人が住めるまちづくりが必要だと思います。残っている大規模プロジェクトは京橋の開発です。課題もあって進まないのですが、長期的にそれがあることを頭に置いて、上町台地の一連のところをどうアピールしていくかが大事です。特に関東の人は、大阪市内に台地があって、御堂筋と段差があるなんて誰も思っていない。OMOが来て、新今宮から昔の新世界、難波方面、てんしば方面、ハルカスまでは訪問先に入りますが、四天王寺は入らない。

吉野：確かに現状は、てんしばから四天王寺に行く人が少ない。四天王寺を回るルートができれば、すごく面白い地形の起伏や寺社集積が資源になります。残念ながらお寺以外に面白い場所、くつろげる店がない。

真鍋：雑誌などを見ると面白いものがあるとわかりますが、それをストーリーでつないで発信することができていない。空堀も万城目学の『プリンセス・トヨトミ』で知られました。空堀商店街、遊び場所、大阪城への抜け穴など。そういうことは、ハリーポッターの9と4分の3というキング・クロス駅のプラットホームと同じで、そういうものがあれば、本を持って空堀に行ってみようかという気になるわけです。また、誘客に関しては、これからはウェブや口コミ、外国のフォロワーのつく方が発信します。それを徹底して集中的にやることが必要ではないかと思います。

川井：これまで大阪環状線は基礎的な機能が欠落している線でした。陳腐化していき、利用も減っていく。指をくわえて見ているような状態でしたが、まずはきちんと基盤整備を行い、鉄道のシステムを機能させる。もう一つは磨きをかけて価値を提供する。そういうコンセプトで再生に着手しました。キーワードは、「明るくしましょう、きれいにしましょう、わかりやすくしましょう」と、ハード的な整備は進んできました。

一方、地域とのつながりでは、大阪市はそれぞれ行政区がありますが、区役所ベースでのお付き合いは全くありませんでした。区役所に権限があるようでなく、区役所では話にならない事もありました。今では、区役所と様々な付き合いをさせていただいたことで、商店街の活性化や駅周辺を整備するにあたり、駅をどうしましょうと会話ができるようになってきました。それが功を奏して、環状線の各駅が、独立した形ですが、磨きがかかってきたように思います。

吉野：天王寺区は市民協働課という部署があり、われわれの上町台地活性化の活動も課長自ら出かけてくれたりします。

川井：喫煙の問題も難波の取り組みが広がって改善されてきています。天王寺は喫煙者に対してより厳しくなりますが、かなりきれいになります。梅田が次に続きます。これには地域の方との協力が不可欠で、そういう付合いの中から商店街の活性化や駅周辺の整備が進んでいます。例えば桃谷や天満の商店街の人と付き合いが深まって、前に進めていく原動力になりました。

吉野：今まで鉄道の方は、地域に入り込むと要望ばかり言われるので引き気味でした。

川井：現状をどうすれば良くなるか、同じ情報を持って、力を合わせられるところは合わしていきましょうという話です。

一方、わかりやすさですが、日本人にも外国人にも極めてわかりにくい街なので、交通ネットワークを充実させていくために、結節点も他社の方々と協力して、他社から情報をいただき、当社の情報を提供することで、お客さまにわかりやすい情報を提供していく。それを海外ベース、国内ベースで進めてきた次第です。これが地域での取り組みです。

吉野：環状線の現場での取組みについてはいかがでしょう。

川井：環状線は様々なお客さまが利用されています。大勢のお客さま、不特定多数のお客さまによりよいサービスを提供するのは、簡単なようで難しいです。無機質になってしまう。社員のマインドも一人ひとりへの丁寧な応対が難しく、機械的になってしまう。そんなことがあった環状線区でしたが、このプロジェクトで追い風として、現場を応援しています、あるいは地域と一緒に歩もうという具体的な活動になるので、社員のマインドが落ちない。

ハード面も整備され、CS（顧客満足）も向上する。ES（従業員満足）も向上する。相乗効果を発揮し、若い人たちのアイデアで学校との連携、あるいは四季折々の変化を感じさせる演出など、おもてなしの形で表現するようになってきました。

ホームの安全も大事になります。大勢が利用するのでホームが混雑し、転落することもあります。鉄道で大けがをしてほしくない。運転士、

車掌、駅の人、ハード整備の技術者、別々ではなくて一緒になって安全性を高めていく。社内の組織間の連携ができるようになりました。

真鍋：駅のあり方には2つあります。駅が拠点としての場所になりますが、特に私鉄は近鉄は上本町と阿倍野、南海は難波、阪急と阪神は梅田、自分のエリアが決まっていて、そこで集客して商売をする。われわれは遅れてJRになったので、駅は単なる通過点ではなくて滞留していただく。自分の商圏として考えるべきだという発想でこれまでやってきました。

これから広域で考えていくことになると、われわれの役割は、拠点を持つだけではなく、少なくとも環状線のエリアは一体として広く見ていく。そういう発想に立つと、直接関係はなくても、横のラインの中之島の川沿いのエリアは、美術館や喫茶店など、休める場所があるエリアにする。その支援をしていく。マイ・フェイバリット関西や、ぐるなびと一緒にやっているのは、そういうことです。

吉野：大阪市のまちづくりでいうと、大阪は秀吉以来、東西がメインの通りでした。それが、関大阪市長が御堂筋、大阪府が千里を開発して南北軸のまちになっています。10数年ほど前から、京阪中之島新線や臨海部開発を契機に水辺の東西軸が動き出しました。大阪は東西や南北だけではなく、環状軸があるのではないかと思っています。環状軸が本当にあるのか、現状では拠点は環状線に点在しています。点在しているだけで、その関係性や軸形成の可能性についてはいかがでしょう。

〈鉄道は拠点でなく移動と捉える〉

真鍋：環状線と周辺の街という意味での発想は、行政よりもわれわれ民間が言うほうがいいと思う。将来を考えると、各駅、拠点のあり方も大事ですが、ループになっている環状線は、この中での動きやすさを考えないといけません。IoTやAIを考えると、最近マース(Maas)という言葉がよく出てきますが、駅からの動きやすさを考える。駅が拠点だと自分の陣取りを、小さな駅であっても、商店街とつながりなくやってしまう。それだけではいけない。

吉野：むしろ駅ナカで完結してはダメという事ですね。

真鍋：駅から商店街へのつながり、動きをサービスにするのがマースです。そこからライドシェアで、自転車やバイクで動くこともあるかもしれませんが、基本は歩きながらつながる。情報をくっつけたマースになると思うので、環状線の各駅からいかに動けるか。そこにとどまるのではなく、周辺とのつながりで動けるようにしていくのが理想ではないかと思います。

吉野：都市計画学会関西支部で、民間デベロッパーや鉄道会社など民間企業中心の研究会をやっています。駅を中心としたエリアづくりをどうするか、特にポストうめきた、万博以後のまちづくり、とりわけ芸術文化の視点で議論していますが、各社の若手もなかなか大胆な発想が言えない。そんな空気を感じます。

真鍋：これからの交通、鉄道を拠点ではなくて移動として考えたとき、これまでとは違う発想が必要です。都市機能としての効率性が高まっ

てきたので、新しい路線の敷設はそれ程ない。お互いの乗り換えの便利さや乗り入れはあるかもしれませんが、それを考えながら、動く側から見てどうなのか。拠点に固定しないでエリア、商店街や居住地域とのつながりを考えることだと思います。

吉野：鉄道会社のトップの方からそういうことを聞くのは初めてです。

真鍋：日本の鉄道の良さはどこにあるか。人口が集積し人口密度が高いこともありますが、日本の都市は政令指定都市と中核都市と特例市、これを合わせると105あり、全体に人口が減りながら、そこに向けて人が集まっています。都市鉄道、特に私鉄は人口が集まっているところにあるので、105からさらに絞って20ぐらいのところにあります。

GDPを生み出すためのエネルギーコストは日本が一番よくて、移動コストに対して鉄道が果たしている役割は大きい。大量の方が安いエネルギーコストで動いていることになるので、それはもっと活かせるのではないか。最終的には、人を拠点にとどめるのではなくて近くを巡ってもらう。点から面に、動けるところからさらにつないでいく流れをつくって行けるのではないでしょうか。

吉野：体験価値が駅を中心に確実に広がります。水都大阪では一連の取組みで、楽しみながら川を使う時代ができてきた。そういう意味では鉄道も、列車の移動や乗り換えだけでなく、駅を起点にエリアの体験価値を楽しんでもらう時代が来るのですね。

真鍋：梅田や新大阪は拠点で、鉄道会社は大規模な周辺の囲い込みをしています。それを今さらとはならないと思いますが、環状線エリアで発想すれば、大規模なものではなく、19駅のうちの少なくとも8割は地域とともに何かしていく事が出来ます。

周辺の土地を買って不動産事業で儲けるという時代は過去のものです。不動産の価値が高くなったこともあって、不動産事業を駅周辺で行うのはかなり難しいと思います。われわれも土地は持っていません。JRになるときに売れそうな土地は国が借金の返済に充てていますし、梅田北ヤードも貨物会社の土地です。

吉野：鉄道会社はお客さんが移動したり降りたりだけでなく、駅周辺の体験価値が高まることが結果的に鉄道の収益につながる、という事でしょうか？

真鍋：拠点開発はどうしても外せない。ただし、これから絶対量が減るので、別の旅行スタイルを提案して動いていただく。滞在していただく。都市型の観光は目玉が必要なので、中之島周辺や大阪城周辺の魅力ある動き方。文化を感じられるものがコアにないと飽きられてしまいます。ここに行けば文化があると思うからパリに行ったりするわけです。

吉野：景観だけではなくて物語があって、行けば行くほど、より深い話を知ってうれしくなる。そういう意味では、中之島も上町台地も、深めれば深めるほど面白い話が出てくると思いますが、焼けてしまって良い景観が残っていない。外国人や地方の方を夕陽丘に連れていくと、坂や緑があって、こんな場所が大阪にあったのかと驚かれます。

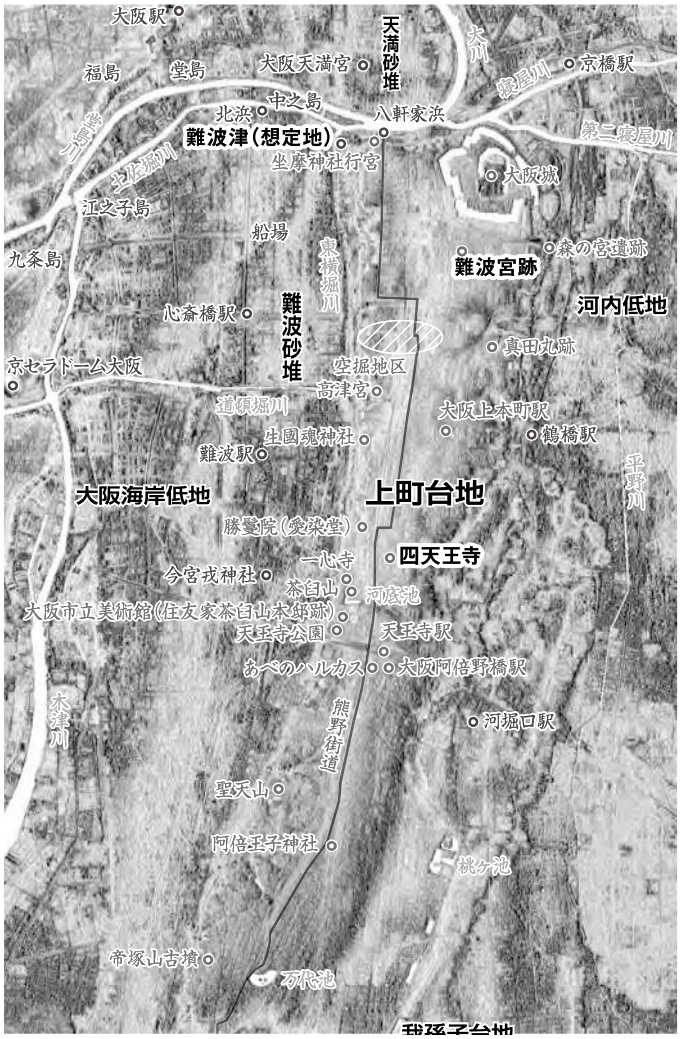
真鍋：小さな資源はいろいろあると思うので、細かく地域の魅力を見つけて大きなストーリーにつないでいく。上手にマッピングしていくことです。

ブラタモリに頼らなくても、自分たちでできることがあると思います。ただ、全国に発信しなければいけない。おとな旅で環状線を深掘りしていくこともあるかもしれない。うちの現場の人たちも環状線周辺しか見ていないので、上町台地でイベントをしたり、地元と一緒に歩いたり、それも必要かもしれないですね。

吉野：八軒家浜の開発は弊社も参加しましたが、京阪の故佐藤会長が、熊野街道を歩かせる拠点にしようと、熊野に行く地図を作成したり、上町台地の街道ウォークや那智で平安衣装の巡礼を再現をしたり、熱心にされていました。現在の加藤会長にも熊野街道をお勧めしているところです。

真鍋：加藤さんとは東海道五十三次の先の五十七次は京阪沿線なので、ストーリーになるかもしれませんという話をしたことがあります。

真鍋：この地図は地形がわかるのでいいと思い



加工：株式会社ココロマチ
提供：三井住友トラスト不動産『このまちアーカイブス 上町台地』編より

「国土地理院「基盤地図情報：数値標高モデル5mメッシュ」を「カシミール3D（http://www.kashmir3d.com/）」により加工し作成」

ます。皆さん御堂筋のイメージはあってもこれを見ると驚かれる。地道にやっていけば少しづつ浸透してくるのではないでしょうか.（図2）

吉野：そういう意味では、上町台地はJRと京阪、近鉄、そして大阪メトロがある。

真鍋：拠点から広げるという意味では、どのように上本町から阿倍野まで地域開発でつないでいくか。それはあると思います。

われわれは、梅田や天王寺など、拠点はもちろんありますが、ビジネスとして人に動いてもらわなければならないのと、担当エリアが広いので、梅田だけではなく大阪全体という発想で考えていく必要がある。そうは言いつつ、各駅の社員は地域とコミュニケーションをとらなければいけない。この両面があります。

川井：京橋駅管区は大阪城公園まで、天王寺駅管区は、環状線は天王寺だけ、間（あいだ）は鶴橋駅管区になりますが、駅から駅、まちを含めたつながりが必要かもしれません。

都市交通は水平方向のバリアフリーと言われますが、環状線は19階建てのデパートと考えると、例えば天満は地下の大食品街、桜ノ宮は屋上のフラワーガーデンという感じ。大阪メトロのようにラケット型のネットワークを持っているところと一緒になっていくことが大事だと思っています。それぞれのエリアに特徴があります。面白くなってきました。

真鍋：地下鉄や京阪の各駅とは交流があり、防災など、万が一の場合は集まります。お客さまの誘導も含めて大事なことなので、広がって良かったと思います。

吉野：大阪メトロも河井社長体制になって、さらに面白くなっていくと思います。ただ、天王寺の駅と地下街はうまくつながってほしいですね。

真鍋：先日、大阪市の博物館機構理事長を引き受けました。

市立美術館には、てんしばを通って誘導しますが、JRの駅から行くには地下に下りなければいけない。地下に下りると「大阪なの？」という感じになります。ここのイメージも課題だと思います。天王寺駅は、入口をわかりやすく改修中ですが、てんしば側から見た天王寺駅は外国の方も含めて、わかりづらい状態なので、改善する必要があると思っています。

吉野：まだまだお話は尽きませんが、鉄道を軸に大阪の将来づくりに本当に多くの示唆をいただきました。真鍋様、川井様、どうもありがとうございました。

以上　（文責：事務局）

観光客が日本の商店街に感じる魅力

石原　武政
一般財団法人大阪地域振興調査会
会長

商店街の暗いイメージ

商店街といえば、かつては華やかに賑わう場所を思い浮かべたものだが、今や衰退業態の代名詞となり、「絶滅危惧種」だとさえ言われるようになった。中小企業庁がほぼ3年に1回実施している商店街実態調査で、「繁栄している」と回答した商店街が1割を割ったのが1990（平成2）年、1995（平成7）年には2％台になり、2009（平成21）年には遂に1％になってしまった。最新の調査である2018（平成30）年には2.6％にまで回復しているとはいうものの、衰退している商店街が37.5％にも達し、決して明るいイメージはない。この間、「シャッター通り商店街」などという言葉もすっかり定着してしまった感がある。

数年前、関西の学生たちに商店街について質問した。「よく行く商店街はどこか」という質問に何と神戸の「Umie」という回答があった。彼らにとって、商店街とショッピングセンターは区別がつかないのかもしれない。中には、「自宅のまわりに商店街はない」というのもあった。不思議に思ったが、よく聞いてみるとニュータウンの居住者である。商店街はもともと自然発生的に生まれたものだから、計画的に作られたニュータウンには商店街はいはない。あるのは、近隣センターや地区センターといった計画的に導入された施設である。商店街を知らない人たちは今や決して珍しくななくなっている。

それでも、商店街でよく利用する施設はどこか聞いてみた。一番多かったのは何とコンビニである。コンビニはしばしば商店街の最強の競争相手と目されるが、それでも商店街の中にあれば、若者はそれを商店街の構成員として認識する。コンビニがあり、弁当屋があり、カフェがあり、携帯ショップがあれば十分だというのであれば、「商店街がなくても生活に困らない」という回答が多くなるのも仕方ないのかもしれない。

インバウンドに酔う商店街

しかし、実際の商店街はそんな暗いところばかりではない。例えば大阪のミナミを歩いてみるとよい。心斎橋筋商店街から戎橋筋、南海通りから道具屋筋、そして黒門市場界隈は、どこを歩いても人で一杯である。そのほとんどは観光で大阪を訪れた外国人だ。「ここはどこ？」「ほんとに日本なの？」と思うほど、外国語が自由に飛び交っている。店主や店員も手慣れたもの

で、外国語で対応する人も多くなっている。関西空港への格安航空の就航以来増え始めたインバウンド客の威力は未だ衰えを知らない。否、まだしばらくはこの傾向は続くに違いない。

インバウンドが注目され始めた頃のあの爆買いは今はほとんど姿を消した。しかし、それでも多くの観光客はまちなかを散策し、買い物をしたり、日本食を楽しむ。正式の食事でなくても、食べ歩き、買い食いのような手軽な食にも人気がある。

観光客にとって重要なのが買い物であり食事であることは間違いない。しかし、買い物だけならネットで十分だし、食だってフードコートのようなところで十分間に合う。それでも観光客はまち中に出て、商店街を歩く。それは私たちが外国に観光旅行に出かけたことを思えば納得できる。観光客は訪問した都市でまちを観察し、歴史と風土を実感じ、人びとの生活の営みを肌で感じる。そして、その雰囲気の中で買い物をし、食事するのだ。買い物は単にモノを手に入れる行為でなければ、食事は胃袋を満たすだけの行為ではない。どこでそれを行うのかが決定的に重要なのであり、まちなかの商店街はその要件を満たしているのである。

観光客もリピーターともなれば、賑やかな繁華街だけではなく、だんだんと普通の庶民の生活空間へ滲み出してくる。繁華街は観光客が多く訪れることによって、次第に観光客相手のまちに変わっていく。日本らしさ、大阪らしさが完全になくなることなどあるはずもないが、それでもどこか元々のまちとは違った雰囲気を漂わせ始める。そうなると、都心地域への飽きも

黒門市場

手伝って、ディープな周辺部にこそ、本当のそのまちの姿を見出そうとする機会が増えてくる。大阪でもミナミの一画だけではなく、観光客が周辺部に少しずつ滲み出してくる傾向は確実に現れている。

彼らはどこへ向かうのか。爆買いのためなら郊外のショッピングセンターでもよかったが、最早そうではない。普通の一般庶民の暮らしのあるところ、その暮らしを支えるまちのあるところとなれば、商店街をおいて外にはない。神社仏閣が目的ならいざ知らず、そうでなければ

商店街のないまちは面白くない。そう考えると、商店街はまだまだ見捨てたものではないはずだ。

地域に根ざす商店街

しかし、その商店街のイメージは、先の暗い商店街の一般的なイメージとはあまりにもかけ離れている。いくら観光客が物好きでも、シャッター通りを見て喜びはしない。彼らが訪れたいのは、地域の中で現に活動し、地域の人びとの暮らしを支えているその姿なのだから。

それにしても、一体、商店街は観光客にとってそんなに珍しいのだろうか。よく「商店街は日本独特のもの」と言われるが、本当にそうなのだろうか。国としての歴史が新しく、比較的初期から通信販売店やチェーンストア、スーパーマーケットなどが発達したアメリカは別として、ヨーロッパやアジアの国を見れば、「公道に面して店が立ち並ぶ空間」としての商店街はたくさん見られる。日本ではもうほとんど見られなくなったが、定期市が立つところも少なくない。

そう考えると、商店街は決して日本独特のものではないはずである。なのになぜそう言われてきたのか。おそらく、その原因は日本における商店街の組織形態と密接に関連しているように思う。日本の商店街の多くは振興組合ないしは協同組合という法人組織を形成している。組織率は最大に見積もって25％前後、おそらくは20％弱程度であろうと推計されるから、決して高いわけではない。しかし、有力な商店街ほど法人化してさまざまな事業に取り組んでいる。

その法人化、特に商店街振興組合という地域組織の法人化は世界にも例を見ないと言われる。定款で定めれば、大型店も非事業者も組合員なることができる。1959（昭和34）年の伊勢湾台風をきっかけに1962（昭和37）年に商店街振興組合法が成立し、それに基づいて結成される法人であるが、協同経済事業だけではなく環境整備事業をも行うものとされている。大売り出しやスタンプ事業などが前者の例で、アーケード設置やモニュメント、椅子の設置などが後者の例である。特に後者の環境整備事業については行政の補助を受けることが多いが、それでも商店街も費用を負担して、商店街の事業として行っている。それが世界的に見ても珍しいと言われるところである。

と言って、観光客がそんなことを知って商店街を見に来るわけではない。商店街が法人組織を作り共同事業を行う、その事業は直接的な収益事業としての協同経済事業だけではなく、非収益事業にも及んである。したがって、そこにはハード的な環境整備事業だけではなく、例えば地域の学校との連携、高齢者の見守り支援や子育て支援などのような地域活動までもが含まれている。

その結果、商店街は単なる買い物空間ではなく、地域の人びとの暮らしの場であり、出会いの場となっている。商店街の構成メンバーと地域の人びとだけではなく、地域の人びと同士がそこで出会い、交流する。そんな「古き良き」時代の商店街の姿が、形を変えながらなお息づいている。そんな商店街が醸し出す温もりのある空間であればこそ、観光客もそこに魅力を感

じることになるのであろう。

生活インフラとしての商店街

要するに、商店街はいまや地域の人びとの生活インフラとなっているのである。もちろん、すべての商店街がそうだというのではないから、商店街の中には生活インフラとなっているところがある、と言った方が正確ではある。しかし、シャッター通りになってしまい、ただ数店の店が並んでいるだけとなってしまった商店街は、観光客どころか地域の人びともほとんど訪れることはないだろう。今後人口が減少していく中で、そんな商店街は急速に姿を消していくことは避けられない。

しかし、それが商店街のすべてではない。数の上では少数でも、生活インフラとなって懸命に取り組んでいる商店街は少なくない。「繁栄している」とまでは言わなくても、「衰退している」わけではない商店街の多くは、地域の人びととの接点を求めている。そして、それが「ディープな大阪のまち」を演出し、観光客をひきつけようとしているのである。

賑わいよりも落ち着いたたたずまい、歴史を感じさせる建物や街並み、それを維持しようとする商店街の人びとの取り組み、それを強化し支持する地元の人びとの営み、それらが観光客を引き付ける。そんな商店街が、大阪の人びとの暮らしの歴史を体現しつつ、さらにこれからのまちの姿をつくっていくことを期待したい。

「裸貸（はだかがし）」を支えた技と経済

髙田　光雄

京都美術工芸大学教授
京都大学名誉教授

1.「裸貸」という世界最先端の住宅供給システム

言うまでもなく、江戸時代の大坂は、日本を代表する商都であった。当時の経済活動の舞台となった大坂の街は、東西の通りや水路を南北の筋がつなぐグリッド状の都市基盤に、木造二階建ての町家や長屋が整然と並んでいた。建物の権利関係は、約八割が借家、残りの約二割が持家であった。八割の借家層は、頻繁に住み替えながら大坂の経済活動を支え、二割の持家層は、事業を維持しながら街のマネジメントを担っていた。借家率が高いこと、持家層による街のマネジメントシステムが発達していたことは世界の大都市と共通している。ただ、その借家群が、「裸貸」と呼ばれる世界最先端の住宅供給システムで供給されていたことは特筆すべき事柄である。

「裸貸」は、木造賃貸長屋建住宅における、言わばスケルトン・インフィル方式による住宅供給である。当時、大家は建物の構造躯体、外壁、屋根などのスケルトン部分のみを所有し、畳、建具、流し、かまどなどのインフィル部分は店子が自分にあったものを自由に調達していた。この仕組みが江戸時代の大坂の街全体で一般化していたのである。このため、街のあちこちに「萬建具所」「新古建具売買所」などと表示された、言わばインフィルショップが存在し、新品のインフィルと中古品のインフィルの両方が販売されていた。

因みに、上方落語に「へっつい盗人」という桂

「裸貸」による長屋のまちなみ

裸貸のしくみ
大阪市立住まい情報センター・
住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）

春団治などが得意とした人気の演目がある。これは、「へっつい」つまりかまどが移動可能な「裸貸」を前提とした話である。「裸貸」の仕組は、古典芸能の世界にも鮮明に映し出されていたのである。

2.「裸貸」を支えた「畳割」という建築寸法調整システム

「裸貸」を支えていた重要な技術の一つが、「畳割」という建築寸法調整システムである。大坂をはじめとする西日本一円の建物は、所謂「京間」が採用され、6尺3寸(1910㎜)×3尺1寸5分(955㎜)の規格化された畳が収まるように「畳割」と呼ばれる「内法制」の寸法システムで調整されていた。

東日本で採用されていた「江戸間」は、柱間を3尺(910㎜)の倍数とする「心々制」の「柱割」であった。畳が「京間」より少し小さいということだけでなく、「心々制」のために畳の寸法が部屋によって異なり、インフィルを規格化することができなかった。

「裸貸」の
インフィルショップ
大阪市立住まい情報センター・
住まいのミュージアム
(大阪くらしの今昔館)

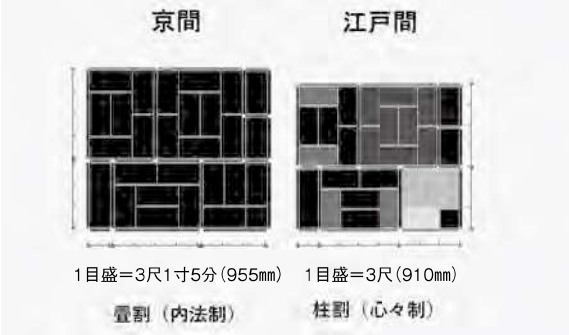
大坂では、「内法制」のために畳を規格化することができた。畳の規格化により建具などのインフィルは全てこの規格で調整されることになり、必然的にインフィルの互換性が生まれることになった。引越しの時に、畳や建具を売っていくこともできれば、次の家に持っていくこともでき、部分的に交換したり、新調したりすることもできる便利な仕組であった。

さらに、インフィルの原状回復費用をめぐる大家と店子のトラブルも回避できた。「裸貸」では、スケルトンとインフィルは、物理的にも権利関係的にも明確に分離されていた。大家と店子の役割分担は明確であり、煩わしい調整を必要としなかった。たとえば、屋根や外壁の修理は大家の責任であり、畳や建具の修理は店子の責任であった。大坂における「裸貸」の普及は、借家率が日本一高い都市における住宅の管理問題を合理的に解決した結果だったとも解釈できるのである。

3.「畳割」に支えられたインフィルの見込み生産と循環ビジネス

「裸貸」のインフィルショップでは、新品のインフィルも中古品のインフィルも販売していた。

まず、新品を売っていたということは見込み生産をしていたということである。インフィルの規格化がなければあり得ないことである。第二次世界大戦後、プレハブ住宅産業が関西で成立、発展したが、プレファブリケーションの理念の構築と産業化は、大坂では、なんと近世から行われてい



京間と江戸間
（畳の色の違いは大きさの違いを表す）

たのである。レディメイドの建具の供給は大坂の借家だけでなく、持家を含む関西一円の「京間」の住宅にも及んだ。また、同時にオーダーメイドの建具も販売されていた。多様なデザインの建具が選択できるカタログ販売が行われていたのである。

次に、中古インフィルである。「裸貸」の普及によって、インフィルは流通市場の中で循環する仕組が確立していた。これは、頻繁な住み替えが行われても、インフィルは廃棄されるのではなく、使い続けられる画期的な社会システムが存在していたということを意味する。また、当然、インフィルの修理も行われていた。一般に、インフィルは、経年劣化によって減価するが、デザインや仕事の良し悪し、修理の有無などによって価格が変化した。江戸時代の大坂では、環境に適合したインフィル循環ビジネスが成立していたのである。こうした産業が成立し得たのは、大坂の経済活動が全体として高い水準にあったからである。「裸貸」は技術だけでは成り立たない。それを支える産業、経済が大坂の「裸貸」を成り立たせていたのである。

4.「経済」「環境」「文化」のよき関係

裸貸」は、商都大坂の経済活動を支える人々の住宅ニーズに適合し、それ自体も市場メカニズムを巧みに組み込んだ生活支援サービスの仕組であった。ただし、その仕組は、「経済」が「環境」や「文化」と対立するのではなく、「経済」、「環境」、「文化」が相互に支え合う社会システムであった。「裸貸」の本質的な意義は正にここにあった。残念ながら、この仕組は、近代化に伴う建築技術の変化や借家市場の変化の中で衰退したが、それでも、第二次世界大戦前の大阪市の借家の1/3は「裸貸」で供給されていた。第二次世界大戦による大阪の借家ストックの破壊と地代家賃統制令や財産税などの施策による借家市場の破壊により、敗戦後この仕組は完全に消滅し、大阪の人々からも忘れ去られそうになっていた。住宅供給の目的が量から質に転じた1970年代以降、筆者らはこの仕組の現代的再編に取り組んできたが、未だ、「スケルトン・インフィル方式」というプロジェクト単位の技術開発に留まっており、社会システムの再編には至っていない。この仕組の現代的意義を再度確認し、「経済」、「環境」、「文化」が相互に支え合う社会システムの現代的再構築を、是非とも大阪から推し進めたいものである。

現代のスケルトン・インフィル方式による集合住宅
（実験集合住宅NEXT21）

和室の世界遺産としての価値

服部　岑生
千葉大学名誉教授

仰向けになり、瞑想する。庭の、風の匂いを嗅ぎながら、庭を楽しむ。(注2) 和室には、私たちに古くから伝わってきた暮らしの形とその感性が存在している。

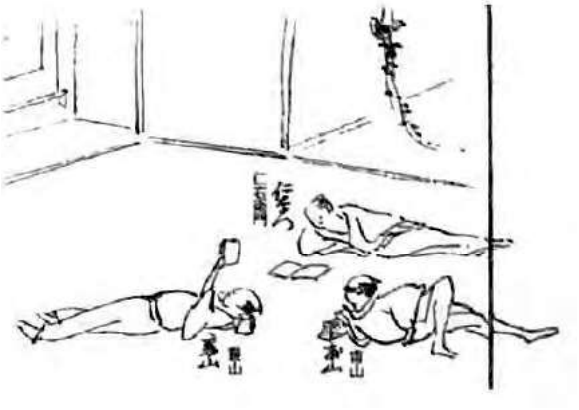
日本建築学会ではここ3カ年にわたり「和室の世界遺産的価値の研究」を続けてきた。和食の伝統が、世界文化遺産となったことで、和室の価値を研究する目的だった。(注3) 和室とは何か、いくつかの探求のポイントがあった。ほとんど椅子とテーブル、ベッドで暮らす日本人にとって、まずは、タタミの和室はどうなっているかという疑問が出てきた。

まず、現代の住まいに和室はどのくらいあるかという問題が出た。国による全国的な統計調査はない。鈴木義弘教授(大分大)の広域の最新の調査があり、減少しつつあるが全国の新築の住宅の概ね7～8割に和室があるという。ストックでは十分な統計はないが、7割以上に和室があるといわれている。普段の暮らしが椅子式なので思ったよりストックの実態もフローも多いことになる。しかし、どうしても和室が少なくなる印象があるのだろうか。和室＝タタミの部屋ということは分かっているし和室のごろ寝も分かるけど普段の和室の暮らしがないように、

庭を見る姿　(注2)

部屋はあるのに日常で和室を使っていないから実感がないということではないか。タタミが無くなるという予想になるが、伊藤圭子所長(アキュラ/ホーム住生活研究所) によれば、新築住宅の80％に和室が作られているという。

現代の人々は、すっかり和室の伝統を失っている。江戸時代の武士の図(注1) のような、和



和室の武士（注1）

室のタタミでくつろぎ接客した姿は、知るよしもなく忘れている。現代の住まいの中の和室は、利用状態が低く住宅に隠され、しまいこまれて存在している。一方新築住宅の一部では好んでもうけられていることになる。和室は、矛盾した存在である。この関係で、有名な住宅建築家の吉田五十八が、大正時代に和室は、タタミの部屋がなくなると予言的な主張をしているが、現

心理実験の写真
和室らしさ（左上から右下で減少）

在そうなってきている。確かに、何にも使われるタタミによる和室文化はなくなった。日本の部屋の転用性という特性は、無くなっている。

日本人は、和室を感性として忘れていくのだろうか。そこで日本人の心の中に、和室を判別する感性が潜んでいるか、あるいは消滅しているかを心理調査で調べてみた。一般人と学生を対象に、伝統的な和室やいろいろなリビングルームの写真を提示して和室の程度を実験した。伝統的な書院造りの部屋、マンションのリビング、民家の居間、大正や昭和の庶民の茶の間、アメリカやヨーロッパのリビングの写真35枚を評価させた。タタミや障子、床の間がある室内は、和室いう判断になるのは当たり前だが、マンションの部屋、タタミのないリビングも、程度の違いがあるが和室として判断された。判断の差は、一般人/学生の間でまた写真による差も大きくなかった。

次のポイントは、歴史と、そこに現れる文化価値とは何かであった。和室の畳は、どのように始まったのか。寝殿造りの寝殿には、畳の原型となる敷物があった。畳で無く小ぶりのマットであった。鎌倉では武士の部屋に畳を部屋縁に敷くスタイルが残っている。書院の時代では銀閣寺東求堂に、敷き詰めた畳が見られる。同時期の茶室にも畳の部屋がある。こうした歴史だが、庶民が畳を使うようになるには、大正時代を超え戦後に至る時間が必要であった。そして現代になり私たち共通の和室がみられるようになった。その大正時代から今日への100年に満たない和室の展開時間だが、すでに減少期に入っているようだ。

もう所定の字数も無くなってきたが、周知のように畳の生産の衰退と職人不足は、和室の減少に追い打ちをかけている。しかし、現代の日本人は、和室という感性とそれに基づく判断力を、まちがいなく潜在させている。実生活では和室の実態は弱くなっているが、暮らし方には強固な文化意識といえる和室愛が隠れているのではないかと思う。この和室の日本固有の文化意識を失っていいのだろうか。和室文化を継承し、発展させて行くには、和室の文化の重要性を意識し、守って行くことは出来ないだろうか。私は、和室の世界遺産的価値を理論化し、日本人の共通の認識にして行きたいと考える。

1) 大岡利昭：幕末下級武士の絵日記、相模書房、2008
2) 和室の楽しみ(筆者撮影、2019)
3) 筆者は委員会幹事：日本建築学会特別委員会【日本建築和室の世界遺産的価値の研究委員会】(委員長東京大学教授松村秀一、2017～2019年度)

一般財団法人大阪地域振興調査会2019セミナー

■ 聖徳太子往来の道・再発見と次世代観光 ■

ー歴史都市大阪と奈良のつながり再発見と次世代インバウンド観光の近未来ー

◆日　時　平成31年3月25日(月) 13：30 ～ 16：30
◆場　所　大阪商工会議所　B1　2号会議室

※組織名・肩書きは当時のもの。

開会；大阪地域振興調査会理事　越知昌賜

挨拶(略)

1．問題提起

大阪地域振興調査会常務理事　　吉野　国夫

吉野：新しい歴史文化観光の流れを大阪・奈良でつくりたいとの思いで今回のセミナーを企画した。聖徳太子1400年忌に向けて四天王寺を含め全国の寺で準備が進んでいる。万博も大きな節目であるが、中間の2022年に向けて大阪の歴史を世界にPRしていく必要があるのではないか。

最も大きな資源は港機能で、古代では難波津であり、現代であれば関西国際空港である。西日本を代表する交通拠点は関空であり、国際観光に関しては成田よりも大きな存在で、世界に対して堂々と国際的な観光文化都市として訴求できる。

歴史的にも奈良と大阪の関係は深い。聖徳太子を契機に大阪と奈良で国際的な観光ルート、歴史文化資源を発掘できないか。それが産業や観光につながればさらに良い。最終的には、聖徳太子を基軸に奈良と大阪を結ぶ国際的な歴史文化観光ルートができればとの思いである。

2. 基調講演

奈良県立図書情報館長　　千田　　稔

千田：インバウンドの時代を迎え、国際交流は重要なテーマになることは予測できる。聖徳太子の時代に隋の国と国交が結ばれ遣隋使が派遣された。遣隋使が隋へ渡ったルートは判明していないが、遣唐使のルートには北路と南路があり、その選択は当時の政治情勢に左右された。新羅と日本が友好的なときは北路、状況が悪いときは南路で中国に上陸する。隋からの使者は難波津に泊まり、隋使専用の館でもてなしを受け、飾り船で江口に通う。四天王寺には御津寺という別称があったとの説もある。四天王寺は隋からの使者を迎えるための重要な役割があり、難波の風格を示す寺としても存在感があった。

日本の使者が言うには、「倭王は天を似て兄となし、日を似て弟となす。天いまだ明けざる時、出でて政を聴き跏趺(かふ)して座す。日出ずれば、すなわち理務を停め、我が弟に委ねん」。兄は推古天皇のことで弟は補佐をしていた聖徳太子。推古朝の政治は夜に行い、太陽が昇ると政治はしない。夜に行うのが日本の政治であり、当時の政治は神まつりであった。伊勢神宮の遷宮も春日大社のお渡りも夜に行われる。本来は夜にまつりを行うが、年月がたち昼と夜とが逆転した。

遣隋使が国書を持って隋に行き、「日出処の天子書を日没する処の天子に致す」と書かれた手紙を渡すと皇帝は激怒し、外交官である鴻臚卿に「蕃夷の書にあらば、また似て聞するなかれ」

国書に東の天皇、西の皇帝という言葉を使っている場合もある。日出処とは東のことであり、

千田　　稔 氏

日没とは西のことである。今の瀋陽も昔は太陽が沈む阳と書いて沈阳という地名だった。中国が劣等感を持ったのではない。日本は無礼な国だから耳を傾けるなと皇帝が激怒したとされているが、それは日没の国ではなく「天子」という言葉が使われたからである。天の神様から指令を受けて地上を治めるのが天子であり、天子は世界中で一人しかいない。

朝貢外交は対等外交ではなく、明らかに隋が上で日本は下である。聖徳太子が対等外交を行ったというのは間違いである。遣隋使の最大の目的は仏教を学ぶことであった。隋の皇帝は菩薩天子と呼ばれており、仏教の交流に務めている。

推古朝の時代、聖徳太子の時代は、すでに道(陸路)が出来上がっていたと考えられる。東西の道は横大路で、横大路は南北の道に比べグレードが落ちる。南北が重要という思想は中国から入った。日本は太陽信仰なので、むしろ東西に重要な意味があった。なぜ縦が重要かは中国の道教信仰にみられる。「天皇大帝」の名が北

極星に与えられた。天皇大帝とは偉大なる帝である。天皇大帝の「天皇」を日本も最高権力者の名に用いている。

日本で天皇という名前が使われたのは、天武期の地層から天皇と書いた木簡が出たので天武期との説もあるが、聖徳太子が亡くなり、舒明天皇、皇極天皇あたりから天皇の称号が使われている。皇極は大化の改新の時の女帝で、舒明天皇の時に皇后が八角形の古墳を築造。八角形は道教では宇宙を表すシンボルであり、夫である舒明天皇が天皇という称号を初めて使ったと想定できる。

奈良盆地に上ツ道・中ツ道・下ツ道という3本の道が等間隔にあり、南北に2本の横大路がある。奈良盆地は重要であり物資を運ぶにも便利であった。それ以降、3本の道の議論はされなくなったが、奈良盆地のような狭い場所に3本の等間隔の道は必要ない。隋から使者が来たときに都を作りつつあることを見せるためであった。

中国の支配の仕方は冊封体制であり、中国の皇帝が中央にいて、新羅や百済、高句麗など、周辺の国は皇帝の指示に従う。

なぜ隋は小国の日本と国交を結んだのか。これは隋に問題があった。隋という大国が高句麗に遠征し戦をするが4回とも隋が負けてしまった。高句麗は小さくても非常に戦力のある国であった。隋は高句麗と仲の良い日本に助けを求めた。高句麗が隋と戦争になるときは日本が高句麗を収めてほしい。そういう願い事があったために、隋はメンツを捨ててまで日本と国交を結ぼうとした。

冊封体制の支配下には入らなかったが、朝貢外交であり、土産物を持参する。お中元やお歳暮の習慣が根付いたのは古代の朝貢関係からである。

将来の心配事として、インバウンドで来てくれる東アジアの人たちはよい人であるが、特に政治が東アジアの世界で悪くなってきた。この問題はインバウンド観光にも影響を及ぼさないかと杞憂している。

下と上があって中間層が成立する。自分たちが偉いとするには偉くない集団を周辺に置かねばならない。倭は優劣の意味を含まないが、卑弥呼・邪馬台国は「卑」も「邪」も悪い文字で、これを日本に使っている。中華思想が当時の中国人の中にはあった。今、中華思想が政治の中に入り込んできている。インバウンドで来られる観光客も日本をそういう目で見る可能性は大いにある。これが中華思想の怖いところである。

聖徳太子の仏教は仏教的宇宙の下で政事をすることであった。心配なのは朝鮮で、朝鮮の人々が守ってきたのは「恨(はん)」の文化である。恨は悪い文化ではなく、朝鮮半島の中心にある文化概念で貴重な文化だと解釈しているが、この概念を近代政治の中で通してくると東アジアの世界は治まらない。韓国からの観光客が恨(はん)の文化で無意識に日本と接するかもしれない。前大統領の朴槿恵の言葉で、日本と韓国の加害者と被害者の立場は1000年の歴史が流れても変わらない、とある。

これまで日本の政権も恨の文化に振り回されているように見える時がある。近代政治学で東アジアは収まらない状況にある。そう簡単には

東アジアの平和はやってこない。「恨」の文化と中華思想があるからで、未来のインバウンド観光では恨の文化と中華思想の文化を超えた地平に東アジアの安定を見出さねばならないと考えていくべきである。

3. 各分野からの報告

（1）古代の難波と奈良を結ぶ水陸の交通について

柏原市立歴史資料館館長　　安村　俊史

安村：遣隋使で小野妹子が行った翌年、裴世清という外交官が来られた。その際に飛鳥に入るルートは、陸路を通ったとの説もあるが、船を使ったと思っている。難波津から河内湖を通り、旧大和川を通って奈良の海石榴市（桜井市）で迎え、徒歩で小墾田宮に入ったと考える。

古代は亀の瀬は船が通れなかった。秀吉の時代に片桐且元が亀の瀬の開削をしたが、江戸時代でも亀の瀬は船が通れない。大和川を通る剣先船も、亀の瀬の手前の峠村で降り、陸路で荷物を運んだ後、奈良県の三郷町から魚梁船に乗り換えて輸送している。しかも大和川は水量が少ないので難儀をしたのではないか。

隋を手本に立派な国に整備しようと考えているときに、あまりにも恥ずかしい話で、船で行き、途中は船が通れないのでいったん陸に上がる。一方で、小野妹子が隋に行くと先が見えないほど幅何十メートルの直線道が伸びている。『日本書紀』に、「推古21年（613年）に難波より京に至るまでの大道を置く」とある。京は飛鳥の小墾田宮、難波は難波津で、そこまで道を整備したとされている。

1970年に京都大学の岸俊男先生が示されたルートは、難波宮からまっすぐ南に行って丹比道（竹内街道）を通り、竹内峠を越えて横大路に入り、飛鳥に入る。これが通説になっているが、岸先生は根拠を示していない。河内から大和に行くには竹内街道しかない。竹内街道に行くには、地図上に難波宮からまっすぐ南北に通る道の痕跡があり、この道を通って竹内峠を越える。これが推古21年の道ではないか。根拠がないので今後の研究に委ねるとしている。これに基づいて、竹内街道が最古の道として広く知られるようになり、日本遺産にもなっている。

この説もおかしいと考えている。大和川沿いの渋河道は、山越えの道（龍田道）を通り斑鳩へ。斑鳩からは太子道（筋違道）があり、斑鳩に住まれた聖徳太子はこの道を通って飛鳥に行ったとある。私はこのルートではないかと思っている。

難波宮から南へまっすぐ伸びる難波大道は大和川の今池遺跡の発掘調査で発見されている。最初に発見されたのは40年ほど前だが、10年

安村　俊史 氏

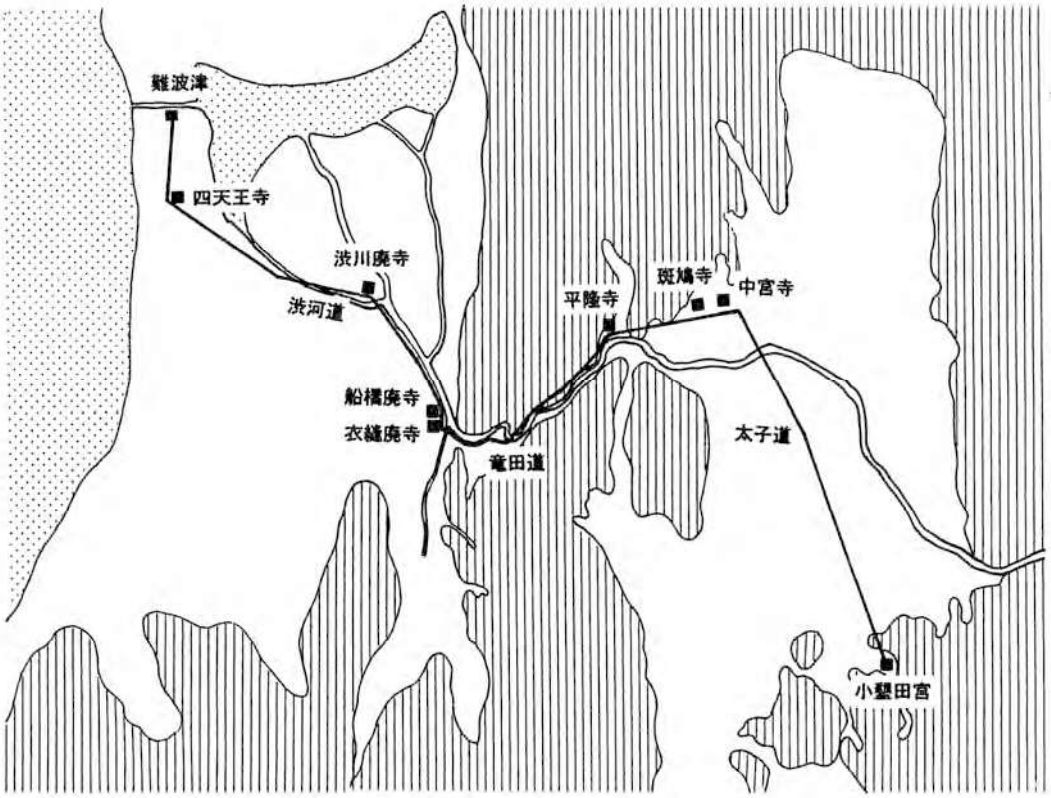
前の発掘調査で難波大道の下層から7世紀中頃の土器が入った遺構が発見され、それをつぶした後に難波大道が整備されたと発掘調査で確認されていることから、難波大道は7世紀半ばか後半で、それ以上古い難波大道は存在しない。

竹内街道、東西の長尾街道周辺には、7世紀の前半に斜めの道が多く存在していたことが発掘調査で確認されている。建物も斜めを向いていたが、7世紀後半になると東西南北を向いており、岸先生が発表された道は7世紀中頃まで下るのではないか。そうなると推古21年の道はどこだとなる。

私は大和川沿いの道ではないかと提唱している。奈良時代、平城宮から難波に行くには龍田道、渋河道を通ったのは明確になっており、道沿いには四天王寺、渋川廃寺、船橋廃寺、衣縫廃寺、奈良の方に行くと平隆寺、斑鳩寺、中宮寺と、7世紀の初めか前半にできた古い寺が並んでいる。

斑鳩に聖徳太子が住んだのは西暦600年前後である。太子道に相当する道は、田原本町で発掘調査がされ、6世紀後半から末にさかのぼるのではないか。『日本書紀』では7世紀初めとあるが、斑鳩と飛鳥を結ぶ道があった。

渋川廃寺も含め八尾の渋川あたりは物部の本拠地であった。物部は蘇我氏や聖徳太子と戦って破れた。その地に建立された渋川廃寺は聖徳太子が死去した直後に完成しており、その建立には上宮王家である聖徳太子一族が深く関係している。その理由として、物部の本拠地は奈良



7世紀前半の難波から飛鳥への路

時代に法隆寺領になったと法隆寺の財産目録にあり、その北側は四天王寺領になる。物部が滅んだ後、上宮王家である聖徳太子一族の土地になり、その後、聖徳太子とゆかりの深い法隆寺と四天王寺に移管されたのではないか。

遣隋使を派遣するなど、聖徳太子の目は中国を向いている。中国から来た使者が斑鳩の地を通って飛鳥へ向かうルートを整備したのは聖徳太子ではないか。聖徳太子が600年頃に斑鳩の地へ来たのもルートの整備と関係するかもしれない。

難波から四天王寺に行くには上町台地の最も高い場所を通る。後に熊野街道になるが、ここを設定したのではないか。

東部市場前駅から平野まで斜めにまっすぐ通る道は現在でも国道25号線として残っている。明治の地図やそれより古い地図にもまっすぐな道があり、現在は東部市場前で四天王寺に行く道と天王寺に行く道と二股に分かれているが、その間をまっすぐ通せば四天王寺の南西の角にピッタリ来る。このルートがあったのではないか。

渋川廃寺へ伸びるルートもあったが、この道の痕跡は残っていない。今の大和川は江戸時代に付け替えられた川で、それまでは長瀬川と玉串川に分かれ、長瀬川沿いに柏原に行き、船橋廃寺、衣縫廃寺という飛鳥時代の寺を通り、大和川沿いに進んで、龍田道から平隆寺、斑鳩に行き、斑鳩からは太子道。これは間違いなくあったので、この道を通ったのではないか。

難波大道、竹内街道、長尾街道は7世紀中頃にできた道ではないか。大化の改新の646年に前期難波宮である難波名柄豊崎宮を造営し652年に完成。その中軸線と難波大道は一致している。道が先にあって宮が後とは考えられないので、宮殿があり、朱雀大路にあたる道をまっすぐ南へ延伸して難波大道を整備。さらに、そこに直交するように東西へ伸びる道を整備する。そう考えると、発掘調査でも東西に向いた建物や地割は7世紀後半でないと出てこないことにも一致する。

その先は竹内峠ではなく穴虫峠を越えたのではないか。『日本書紀』には、龍田道と穴虫峠を越える大坂道は重要な道であり、天武天皇が2本の道に関を置いたとの記述がある。竹内峠を越える道は古代では考えられない。この道が盛んになるのは江戸時代ではないか。2本の道を使い、横大路や上・中・下の道を使って飛鳥に入る。

柏原市と三郷町とで山越えの龍田道の整備を進めている。観光に生かそうと取り組んでおり、今年1月には日本遺産に申請。結果は5月に出るが、今年認定されなくても来年も申請しようと両市でイベント等も始めている。

（2）聖徳太子が見た斑鳩の風景

帝塚山大学 教授　　清水　昭博

清水：聖徳太子が拠点を置いた斑鳩は、ヤマトの玄関口であり、ヤマトから河内への出口にもあたる重要な位置にある。斑鳩には、聖徳太子の時期に開発された痕跡として、地割れに沿って施設が発見されている。記録では、601年に斑鳩宮の造営に着手し604年に宮殿に移ったと

清水　昭博 氏

ある。造営にしては時間を要しており、地割を行い、斑鳩宮の周辺に施設を配したのではないか。その基準になったのが太子道と考えられる。

有名な法隆寺の夢殿は東院、五重塔のあるエリアは西院で、東院は奈良時代に僧行信が斑鳩宮の荒れ果てた姿を嘆き、安倍内親王に奏上して創建。法隆寺の東院の解体に伴う発掘調査を行った結果、斑鳩宮跡との説がある。

最初に創建したのが法隆寺で、いつ創建されたかの記録はないが、法隆寺の薬師如来の銘文に607年とあり、考古学的にも矛盾しない。

斑鳩宮の東に五重塔の基礎になる心柱を置く大きな石があり、昭和14年の発掘調査で、若草伽藍、五重塔跡、本堂跡を発見。南北に建物が並んでおり、このスタイルは四天王寺も同様で、日本の仏教建築の源流をさかのぼると朝鮮半島の百済という国で、百済スタイルの古いものだと判明。

法隆寺の創建は記録では607年とあるが、考古学的には出土した土器などで確認する。当時の瓦はお寺にしか使われない高級材で、若草伽藍の瓦が出土している。現在のファッションと同じで時代によってスタイルが変わるので年代を特定できる。600年頃の瓦で、607年に聖徳太子が創建した寺であるとの物的証拠となる。

最初に斑鳩宮が造営され、その隣に法隆寺が創建され、その後、数々のお寺が斑鳩に創建される。次に創建されたのが中宮寺で、法隆寺のすぐ横にあり、文化財としては弥勒菩薩や天寿国繍帳が有名。現在の中宮寺は飛鳥時代にあった場所ではなく、飛鳥時代は現在の場所より500mほど東側に存在した。

中宮寺は聖徳太子の母親の穴穂部間人皇女のために宮を寺にしたと伝えられている。記録では620年頃の造営で、瓦で確認すると考古学的に年代と記録が合致するが、さらに古い瓦も発見されているので、聖徳太子の時期に仏像が建てられていた可能性もある。

法隆寺、中宮寺よりも北側のエリア、斑鳩町の三井や岡本あたりが斑鳩宮ではないか。しかし、この二つの寺は山背大兄王が建てた寺と考えられる。その一つが法起寺で、古代の記録では池後尼寺と呼ばれている。推古30年に太子が岡本宮を寺に改めることを山背大兄王に遺言、

638年に弥勒仏を本尊とする金堂を建てたと記録されている。

飛鳥時代の終わりに建立された三重塔が現存している。境内を発掘すると飛鳥時代の終わりの三重塔よりも古い遺跡が出ている。620～630年代の瓦で、年代的には記録と合致している。

法起寺の近くにある法輪寺は、山背大兄王が太子の病気平癒を願って創建された寺で、三重塔は1944年に焼失し1975年に再建。630年代の瓦からも山背大兄王の時代の創建だとわかる。尼寺である法起寺に対して、お坊さんの寺をセットに建立されたのではないか。

現在の平隆寺は江戸時代に建てられているが、飛鳥池遺跡から出土した木簡に平群寺とあり、これが平隆寺に該当し、記録では聖徳太子が建立した46ヶ寺の一つである。三郷町は、昔は平群郡で、中世の記録には、推古9年(601年)、平群神手により創建とある。この人物は物部と蘇我の戦いに太子とともに参加した将軍でもあり、有力豪族の平群氏が建立した寺だと記録から読み取れる。

7世紀初頭から後半に分けているが、瓦のスタイルが変わる時期に建立されたと考えられる。7世紀初頭の瓦が出土しており、西暦では600年代で、平群の神手の時代になる。その後に出土した7世紀前半の瓦には新羅系の瓦が使われている。この頃に五重塔や金堂が建立され、7世紀後半、680年頃に寺のリフォームがされたことが瓦から読み取れる。

瓦は木の型を使い、同じ型の瓦を複数の寺が共有。平隆寺と共通する型の瓦は中宮寺と法隆寺にもあり、いずれも聖徳太子ゆかりの寺である。当時の瓦は寺にしか使われない高級材で、お寺を建立するには多大な経済力と政治力が必要なことから、バックには有力な皇族がいた。瓦からも平隆寺と聖徳太子の関係がうかがえる。法隆寺の瓦は後に四天王寺にも使われている。大阪と奈良を結びつける物的証拠としても重要なものではないか。

聖徳太子が西暦622年に亡くなり、その後643年に息子も亡くなり、上宮王家の聖徳太子一族は滅びる。西暦670年に法隆寺が火災により焼失、その後、見事に再建を果たして現在の法隆寺がある。再建の象徴になったのが瓦である。

寺を建てるには経済力が必要であるが、焼失しても早い時期に見事に再建されている。それをどう評価するか。法隆寺周辺にある中宮寺、法起寺、法輪寺、平隆寺はすべて同じデザインの瓦を使用している。斑鳩全体の寺が法隆寺を統一デザインとして再整備していく。その背景として聖徳太子信仰があり、斑鳩に拠点を築いた聖徳太子は仏教を軸としたアジアレベルの都市づくりを夢見たのではないかと考える。

（3）大阪と奈良を結ぶ歴史文化観光の可能性

東大阪ツーリズム振興機構　理事長　　清水洋一郎

清水：東大阪は山がきれいで古い歴史を持っている。約6千のものづくり企業があり、ものづくり観光で年間6千人の修学旅行生が訪れる。歴史と伝統の中でものづくりが脈々と生きている。ラグビーが盛んな下町で、石切神社や平岡神社があり、街道のイメージもある。

清水洋一郎 氏

東大阪は荒本が中心で、万博と直結する。今月、新大阪からのJRおおさか東線が開通。2029年には伊丹空港からモノレールが開通、東西線が出来上がっている。

DMOは観光庁が主導し、地域が観光経営をして稼ぐ力をつける。全国に222あり、東大阪でもDMOを設立。来年度の観光庁の予算は700億円で、昨年の3倍に増えている。空港税が導入され、数百億円を観光開発で集めていく。その前提がDMOで、太子の道を世界に出すにはDMOとの連携が最も早い。これが展開のポイントになる。

東大阪は「住んでよし、訪れてよし、稼いでよし」のまちづくりを目指している。ブランドづくりがポイントで、各地域の歴史文化を広めるとともに、情報発信、マーケティング戦略を立て、自治体だけではなくNPOも巻き込んでいく。DMOは重要な役割を持っているので今後のキーになる。

花園ラグビー場を180億円かけて改修。今年の9月22日にワールドカップが開催され、4試合あり試合の第1日目は売り切れるほどの大人気になっている。神戸でも開催されるが、観光の中でもスポーツツーリズムという新しい展開がある。

インバウンドに関しては昨年3100万人をついに突破。トップは中国人の838万人で、1兆5千億円の消費額があり、全体の3割。全体でも8.7％伸びている。2013年の1.4兆円から4.5兆円まで観光収入が伸びている。

観光庁は2020年に4千万人、これは今年3千万人を超えているのでクリアできる。ところが外国人の個人消費の8兆円、これは難しいといわれている。稼ぐのが下手でお客さんは大勢いるのに相変わらず安いものを提供している。これからは本物で稼いでいくのがポイントになる。それには単なるエンターテインメントではいけない。本来の歴史を理解しなければならない。

2015年は11億人が全世界で動いている。2020年には16億人と予測されている。内閣府の数字では2020年には200兆円あり、観光収益の増により予想どおりの大観光時代になってきた。

インバウンドの課題として、ビザが必要なことと、言葉が話せるかどうか、国際スタンダードのものが提供できるか、ITに弱くITの展開も必要、これらの課題を観光庁で議論を重ねている。

「モノからコトへ」となり、爆買いは終わり、精神的な豊かさを求める消費者の感情がコト消費へと向かっている。外国人観光客の6割はリピーターで、10回以上の人が14％もいる。何度も来ていると、田舎に行きたい、もっと深い

場所に行きたいという気持ちが強まる。急速に外国人が周辺に行き始めている。四季の体験や農漁村体験、充実した精神世界、豊かさを求めている外国人が増えている。ニセモノのチャンバラではなく、本物の武士道や弓道を学びたい。本格的な精神世界を味わいたいと思っている。

東大阪は何もないまちだと思っていたら、とんでもない。昨年は「体感まち博2018」を開催、体験も含め73のプログラムがあり、約1000人が参加。埋蔵文化財センターでは最先端のバーチャルリアリティで河内寺をCGで再現。そういう素地もできている。

東大阪の往生院六萬寺は6千円で滝行が体験できる寺で、大阪から20分の場所にある。外国人にも滝行を経験してもらった。体験という世界が広がると確信しているので、今後はこの方向だと思っている。

寺泊という新しい旅の形、寺に泊まろうという提案である。寺に泊まり、体験したことのない新しい旅を見つける。宿坊で座禅や瞑想、写経などの修行を体験したり、地域のお祭りに参加したり、普段は体験できない時間を持つことができる。体験の旅として寺泊が広がってきている。

全国社寺観光連盟の展開で、元観光局長の藤野公孝先生をトップに、観光庁や環境庁、文化庁、経産省など、国も絡んでおり、様々なプロジェクトが動き始めている。

「和空下寺町」は寺泊の新しい形で、最近オープンした宿坊「和空三井寺」は1日1組限定で30万円。2名で泊まれば1名あたり15万円、4人だとさらに安くなるが、30万円でも外国人は宿泊する。宿坊のプロジェクトが生まれてきており、ここを目指せばビジネスになる。

「和空法隆寺」は2019年の春にオープン、華道や茶道の体験ができる2階建ての施設である。下寺町や法隆寺のように、太子の道を寺泊で埋めていくことにより、新しい体験、本物の体験を外国人にも提供できる。全国で100施設を目指しており、この動きはさらに広がってくる。

歴史文化観光ルートがテーマで、歴史街道はあっても奈良と大阪はつながっていない。今回はまさに新しい展開ができる時代が来たと実感しており、大阪と奈良を結ぶ新しい歴史の街道ができると思う。2021年から2022年にかけて1400年の記念イベントと聖徳太子を軸に新しい道の構想を発信、コンテンツと体験プログラムを作成し、DMOとの連携を通じて仕上げていけないか。SNSなどIT戦略を駆使し外国にも発信。寺泊のプロジェクトも含め、これが今回の展開のポイントになる。

DMOとしては、広域では関西観光本部、大阪府市内は大阪観光局、奈良県にはビジターズビューローや民間のDMOである斑鳩産業があり、これらが連携して取り組んでいく。南大阪も巻き込むのであればKIX泉州ツーリズムビューロー（泉佐野など9市4町の構成で4月設立予定）や大阪観光局、奈良県ビジターズビューローを巻き込めばよいと思う。

観光ルート化の流れとして、商工会議所の協力も得て関西で歴史街道のプロジェクトを組んで固める。次は、文化庁、観光庁、環境庁、経産省、特に観光庁は資金を持っているので、そ

のための施策として、インバウンドの方々が楽しめる新しい本物の歴史体験を提供する。それを大阪と奈良で行えば、宿泊施設の誘致拡大にもつながり、投資を呼び込むこともできる。

中国も含めて投資の対象はニセコで、ニセコは5万円の土地が150万円。銀座並みであるが、それでも求められており、投資を呼び込んでいる。北海道は終わったので、今は八甲田や十和田、ダイヤモンドルートの福島県、神奈川県、関西では奈良、広島も候補になっている。ゲストハウスの流れも活かし投資を呼び込めればプロジェクトとして見えてくる。大阪万博までに仕上げることができればと思う。

（4）パネルディスカッション

吉野：これまでの話をまとめると、千田先生からは国際的な観点、遣隋使の時代の日本の位置づけ、聖徳太子が絡む背景など、明確にご指摘いただいた。未来の国際観光・交流を考えるときに、日本を含むアジアの中で、中華思想や恨の思想がベースとなる精神世界、民族思想を克服できるのか。これからの観光は深い精神世界の体験を求める時代になってくる。

安村先生からは、7世紀中頃の難波宮の時間軸と、遣隋使が難波とヤマトを結んだ時代の交通は明確に異なる。そのポイントとして物部の本拠地を法隆寺領と四天王寺領に分けている。これは「四天王寺の鷹」という本にも書かれており、法隆寺のガイドブックにも荘園として渋川周辺のエリアが出ている。聖徳太子が往来した時代の寺の重要性、仏教思想の象徴である寺をどう見せていくのか。国際的なイメージづくりの考えたルート、寺をつないでいくという手法もあるかもしれない。

清水（昭）先生からは、聖徳太子と王子たちが建立した斑鳩の寺院群を中心にまちづくりが行われ、法隆寺の焼失後一斉に再建していく。その大きなエネルギーを当時の瓦が証明しており、瓦を通じて法隆寺と四天王寺がつながる。深い物語があり、古代を通じても奈良と大阪の関係は立証される。

清水（洋）さんからは、今後インバウンド観光はさらに大きく変化していく。大阪と奈良をつなぐ歴史街道の提案もあり、滝行やVRでの古代の寺の再現、宿坊など、将来を彷彿とさせる事例の紹介もあった。観光が変化していくのは確実な未来であり、歴史を観光化し体験によってお金を生んでいく流れができるかもしれない。

安村：古代の道は大和川沿いの道であり、これを活性化させたい。亀の瀬は古代から地すべりの恐怖があった場所にもかかわらず最も重要な道として重視されている。ここを歩くことで古代の風景を感じるとともに、地すべりという現代的な問題についても考えてもらえないかと期待している。

清水（昭）：聖徳太子の時代に新羅的なデザインの瓦が出土していることから地域や海外との関係が見えてくる。病気になった推古天皇のお見舞いに山背大兄王が小墾田宮に行かれた際に、近くの尼寺に宿泊されたとの記録があり、寺は宿泊の施設も兼ね備えていた。それを強調すると知的な方々にとっては魅力的かもしれない。バーチャルで古代の寺や遺跡を再現できると思

った次第である。

清水（洋）：AR・VRがコンテンツづくりのキーになる。においまで体感できる。単なるエンターテインメントではなくて本物を見せていく。聖徳太子に人間像にまで深く踏み込めば聖徳太子建立の46ヶ寺とつながる。そこには人間模様もあり葛藤もあった。それを映像化していく手もある。

吉野：論点1の往来の道についてコメントをいただきたい。

安村：本当に道があったかは発掘調査で確認されないと考古学的には決着がつかない。渋河道と龍田道は確認されていない。それが今後の課題で、そこに道があると意識すれば発見される可能性はある。

清水：安村館長の仮説はわかりやすく、既存のルートから整備していくのは自然であり、同時代の遺跡が伴っている。寺は信仰の場だけではなく、権威的な象徴としてメインの街道沿いに有力豪族が寺を建てる。水路跡に陸路ができているが、水路がなくなったわけではなく、どちらも使えるのが安村説のメリットである。

吉野：あくまで仮説であるが、提案することで議論を呼ぶ。発掘が進めば明確になるが、その前に聖徳太子往来の道というコンセプト、物語で何かできないか。すでに竹内街道は日本遺産に登録され、大阪と奈良でイベント等も実施している。往来の道は仮説ではあるが、大きな可能性を秘めており、今後も学術的に深めるとともに、その意味や考えを共有し、さらに議論ができればと感じた次第である。

次に論点2の歴史文化観光のコメントをいただきたい。

清水（洋）：民間との連携を前提に大きな視点で大阪と奈良をつないでいく。巡礼の道がヒットしており、時代を越えて古代の人たちの思いや歴史の重みがある。広い意味で歴史とのつながりをみた上での連携が新しくできれば非常に面白い。古くからの歴史を超えて民間との連携やスポーツ交流も含め、大きなイメージで新しい観光ルートができればと思っている。コンテンツを映像化して魅力を高めていくのもポイントになる。

清水（昭）：帝塚山大学付属博物館は約1万点の瓦を収集している。巡礼の道で瓦も一つのテーマにならないか。法隆寺には鎌倉時代の鬼瓦があり、奈良の古い寺には300年前の鬼瓦が普通にある。鬼の顔も様々で作者名や年号もある。日本だけではなく瓦には中国3千年の歴史があるので、東アジアという視点からも瓦は良い材料になる。

清水（洋）：歴史観光は欧米の方に絞った方がよい。ボリュームは少ないが、ユニークな宿泊ルートが増えてくれば周辺にスポーツ体験等の施設もできてくるのでさらに広がっていく。消費を伸ばすためにも宿泊施設を用意して夜の体験も増やす。これが次のステップになる。

吉野：会場に奈良県や大阪府市の方が来られていますので、コメントいただけませんでしょうか？

大阪府文化財保護課長　**森屋直樹**

森屋：大阪府の森屋です。安村さんの説は以前から知っておりますが、竹内街道もやはり重要

なルートだったと考えます。河内から大和へ入る複数のルートを考えて取り組んでいくのがいいのではないかと思います。

奈良県地域振興部文化資源活用課 課長補佐 **安田太津子**

安田：奈良県の安田です。奈良県では、歴史文化資源を活用した地域振興に取り組んでおり、聖徳太子没後1400年を迎える2021年に向けて聖徳太子プロジェクト推進協議会(県下の関係自治体が参加)を立ち上げて活動している。これまでは奈良県内の取り組みが中心だったが、今後は大阪など他府県との歴史的なつながりをいかした、協働の取り組みができればよいと考えている。

大阪府住宅まちづくり部都市空間創造室 **谷田公宏**

谷田：大阪府住宅まちづくり部の谷田です。大阪府でも、大阪と奈良にまたがる竹内街道沿いの移動の円滑化を促進しているところ。H29年度に日本遺産に登録されて以降、周遊バスを走らせたり、自転車による周遊を進めている。この4月13日(土)にも自転車によりまちの見どころを周遊させる「サイクルロゲイニング」を実施する予定である。

大阪市経済戦略局観光部長 **秋田健治**

秋田：大阪市の秋田です。観光の視点からになるが、今後もインバウンド来訪者を増やしていくには、中国、韓国等の東アジア中心から、欧米・豪州等にターゲットを広げていくことが重要である。

・そのためには、いわゆる「モノ消費カラコト消費」と言われるように、今日のテーマのような文化的な施策を展開・充実させていくことがますます重要になってくると考えている。

大阪府府民文化部魅力づくり推進課 課長補佐 **橋本武雄**

橋本：大阪府の橋本です。大阪府としては、インバウンド観光客が大阪市内に集中している現状を踏まえ、府域全体に周遊を促進することが課題であると考えている。そのため、府としても大阪観光局や、各市町村などと連携して取り組みを進めているところだ。清水(洋)様のお話にあったとおり、聖徳太子没後1400年となる2021年はゴールではなく、このプロジェクトをきっかけとして、観光集客の起爆剤とすることは大事であると思った。

府域での周遊促進で課題になるのはやはり移動手段の確保、鉄道会社等公共交通機関との連携が必要である。

近鉄グループホールディングス株式会社 広報部　部長 **杉本昌弘**

杉本：近鉄の杉本です。太子往来の道は、あたらしい観光資源になる可能性が大いにあると思います。会社としても移動や情報発信でご協力させていただきたいと思います。インバウンドでも欧米の方の訴求が大事だと考えています。

吉野：いろんなご指摘ご意見が出てきました。まとめに入らなければいけませんが、聖徳太子往来の道は大阪と奈良が連携出来る大きな資源

だという事では共通していたように思いますが、最後に千田先生から一言お願いいたします。

千田：日本の歴史の道は、日光街道や高野街道、伊勢街道のように街道に宗教施設の名前が付けられている。これは日本人の宗教意識の高さを示しているのかもしれない。太子は太子道がある。関西の観光開発にも宗教街道的な重みがあった方がよい。

東アジア全体が一つの観光ルートになったときに、聖徳太子だけではやっていけない時代が来る。聖徳太子観光は奈良と大阪の問題ではなく、奈良と大阪が土台になって東アジア全体の国際観光に展開していく。

吉野：まさに聖徳太子がいたから東アジアという壮大なルートができた。それを最終目標に奈良ー大阪の大観光ルートにつなぐ。日本は世界の中でも特殊で、仏教を中心とした非一神教、神道もあれば仏教もあり、他の宗教に対しても受け入れる精神、伝統がある。

千田：聖徳太子とならんで重要な人物に行基がある、観光も重要であるが、関西全体の地域づくりで行基の勉強会や寺めぐりが行われている。関西ではこの二つを活用していきたい。もう一つは四天王寺の絵伝で、昔は絵伝に観光ツールの役割があり絵で説明できる現代の絵伝ができないか。個々の聖徳太子観光も大事であるが、欧米の観光客には仏教で聖徳太子という人物を紹介していく方法も大事である。

吉野：私にはまとめる力も時間もないが、千田先生から、奈良・大阪だけの聖徳太子ではなく東アジア全体でとの提案があった。また、聖徳太子絵伝の意味や未来における絵伝、VRも含め人々に直接訴えかけて感動してもらえるツールも必要かと感じた。

本日はどうもありがとうございました。千田先生、各パネラーの先生に、盛大な拍手をお願いします。

（文責：事務局）